山田町文化財調査報告書第１集

中村（なかむら）遺跡

1983. 12

宮崎県北諸県郡山田町教育委員会

序

中村遺跡発掘調査報告書をここに刊行いたします。

本調査は山田町内における遺跡発掘第１号であり、今後の文化財保護事業の進歩に大きな影響をもつ極めて意義深いものであります。

今回は県道牛之脛山田線特殊改良工事予定地内に中村遺跡があり、これを記録保存するため、工事主体である宮崎県土木部都城土木事務所から山田町教育委員会が委託を受け、事前発掘調査をしました。

この報告書は、今後の山田町の遺跡発掘調査の足がかりとなるものであり、学術資料として、また社会教育・学校教育の教材資料として広く活用していただくと共に本町文化財保護事業の今後の指標となることを心から願うものです。

尚、発掘調査に際しては、宮崎県土木部都城土木事務所・宮崎県文化課等、各関係機関をはじめ、地元の方々の協力をいただき、調査に多大の成果をあげることができました。ここに関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和５８年１２月

山田町教育長　中薗勇作

例　　言

1．本書は県道牛之脛山田線の特殊改良工事に伴い、山田町教育委員会が実施した中村（なかむら）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和58年３月７日から同年３月31日まで実施した。

3．調査関係者の次のとおりである。

調査主体　山田町教育委員会

教育長	中薗勇作
社会教育課長	大石厚雄
文化財担当	橋本耕二
庶務担当	柳田　徹
調査員	北郷泰道（県教育庁文化課主事）
	日高孝治（〃）
調査協力	有田辰美
遺物整理協力	津隈久美子・増田　慈子
	酒井　晴子・日野美智子
	有田　具子・荒武　望恵
	加藤　泰子・長友　玲子
	高橋加奈子

4．遺物の実測・トレースは、県文化課・菅付和樹氏・埋蔵文化財センター・谷口武範氏・津隈久美子氏に協力いただいた。

5．本書の執筆は、石器については北郷が行い、その他は日高が行った。

6．本書の編集は日高が行った。

7．本報告の方位は磁北である。また、レベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第1章　序　　説

1. 発掘調査に至る経過 …… 1頁
2. 遺跡の位置と環境 …… 1
3. 発掘調査の概要 …… 4
4. 層　　位 …… 6

第2章　遺構と遺物

1. 遺　　構 …… 8
   - ① 1号住居跡 …… 8
   - ② 2号住居跡 …… 9
   - ③ 土坑・ピット …… 11
2. 遺　　物 …… 13
   - ① 縄文式土器 …… 15
   - ② 石　　器 …… 24
   - ③ そ の 他 …… 25
   - ④ 小　　結 …… 27

第3章　ま　と　め …… 29

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡所在地図 …… 2
第 2 図　遺跡周辺地図 …… 4
第 3 図　発掘区全図 …… 5
第 4 図　土 層 図 …… 7
第 5 図　1号住居跡実測図 …… 8
第 6 図　1号住居跡出土遺物実測図 …… 8
第 7 図　2号住居跡実測図 …… 9
第 8 図　2号住居跡出土遺物実測図 …… 10

第 9 図　土坑出土土器実測図 …… 11頁
第 10 図　遺構分布図 …… 12
第 11 図　縄文土器実測図 (1) …… 15
第 12 図　〃　〃　(2) …… 16
第 13 図　〃　〃　(3) …… 17
第 14 図　〃　〃　(4) …… 18
第 15 図　〃　〃　(5) …… 19
第 16 図　〃　〃　(6) …… 20
第 17 図　〃　〃　(7) …… 21
第 18 図　〃　〃　(8) …… 22
第 19 図　〃　〃　(9) …… 23
第 20 図　石器実測図 …… 24
第 21 図　その他の土器実測図 …… 25
第 22 図　遺物分布図 …… 26

表　目　次

表 1.　山田町内の遺跡 …… 3
表 2.　縄文土器観察表 (1) …… 30
表 3.　〃　〃　(2) …… 31
表 4.　〃　〃　(3) …… 32

図　版　目　次

1.　遺跡遠景，発掘区全景 …… 33
2.　遺物出土状況，1号・2号住居址 …… 34
3.　出土縄文土器 …… 35
4.　出土石器 …… 36

第1章　序　　説

1. 発掘調査に至る経過

山田町から霧島御池に至る県道牛之歴山田線の改良工事は昭和５５年から着手され，中村地区の着工は５８年の予定であった。

昭和５７年初め，中村地区の工事予定地内で土器片が発見されたという報告があり，町教育委員会で調査した結果，県道に沿う土手を掘削してつくった民家木戸口の断面に多数の土器片が露出していた。８月２５日県文化課の面高哲郎主任主事に依頼して確認調査を行い，縄文期の包含層であることが判明したので，県文化課，都城土木事務所と事前協議を重ねた。

協議の結果，工事計画変更が困難であるため，着工前に発掘調査をして記録保存の措置をとること，調査主体を山田町教育委員会とし，都城土木事務所の委託を受けて行うこと，諸般の都合により発掘調査を５７年度，報告書作成を５８年度に行うことなどが決められた。

５８年３月７日県文化課日高孝治主事の担当で発掘調査に着手し，３月３１日に完了した。

2. 遺跡の位置と環境

山田町は，都城盆地の北西部，すなわち霧島山系の東端の部分に位置し，北を高原町・高崎町と接し，東西及び南は都城市と接している。町内は西から東へ縦走する丘陵地・台地が５条に走りその間を古江川・大古川・木之川内川・山田川が流れ，それらによって形成された河岸段丘及び沖積地に集落が営まれている。中村遺跡はそれらの河川の中の山田川によって形成された河岸段丘上に位置する遺跡である。

山田町内の遺跡は，戦前より，瀬之口傳九郎氏等の遺物表採により，数ケ所その存在が知られていたが(註1)，明確な位置の確認が行なわれておらず，「全国遺跡地図」(註2)には，町内の遺跡は記載されていないという状況であった。しかし，近年，九州縦貫自動車道にともなう分布調査や(註3)，地元の方々の発見により，現在十数ケ所の遺跡が確認されている。

町内の遺跡は，各地に点在しているが，それらを時代ごとに概観してみたい。

旧石器時代の遺跡については，現在の所確認されてはいないが，同じ霧島山麓の鹿児島県栗野町・吉松町(註4)において発見されており，存在の可能性が考えられる。

縄文時代については，榎田遺跡・修行遺跡・中村遺跡等が確認されている。今までの所は縄文時代後・晩期にかけての遺跡が分布しているが，早・前期の遺跡は当地方特有のボラ層（御池ボラ）の下にあるため，発見されにくいという条件があるためで，ボラ層の下に良好な状態で保

存されていると思われる。

弥生時代については，楞崎(うるいざき)遺跡・茅原(かやはる)遺跡等があげられ，南九州で見られる甕の頸部に絡縄突帯を付ける，いわゆる，成川式土器の系統を引くものが表採されている。

古墳時代については，山田古墳が上げられる。また町内には現在の所，南九州独特の墓制とされる，地下式横穴墓の発見例はないが，近接している都城市志和池・菓子野で発見されているので，町内に存在する可能性も考えられる。

第1図　遺跡所在地図

歴史時代については，中世の山城である山田城址，島津氏が屋形を構えたとされる薩摩迫遺跡等があげられる。また，当地は中世より島津荘のなかで「北郷三百町」といわれる部分で，荘内でも重要な位置にあったと思われ，荘園関係の遺跡も考えられる。また，古石塔の存在もしられている。また，瀬之口遺跡では経筒のふたも表採されている。

番号	遺跡地	所在地	時代	備考
1	中村遺跡	大字山田字下川窪	縄文	
2	茅原 〃	〃 下長谷	弥生	
3	乙守前 〃	〃 乙守前	弥生	
4	修行 〃	〃 大谷	縄文	
5	椿崎 〃		弥生	緒締突帯
6	瀬之口 〃	〃 町田	〃	
7	曲迫 〃	〃 曲迫		
8	山田古墳	〃 細山	古墳	
9	長谷遺跡	〃 鏡掛	縄文	石斧・磨石
10	山田城跡		中世	
11	西椿遺跡	〃 栄才松		
12	柿木原 〃	〃 〃		
13	合戦場 〃	〃 合戦場		
14	浜之段 〃	〃 宮ノ尾		
15	薩摩迫 〃	大字中霧島字西脇	中世	
16	榎田 〃	〃 榎田	縄文	深鉢
17	六反 〃	〃 六反		

（付） 明確な遺跡の位置確認が行われていないが，遺物が表採されているもの。

1	桜ケ丸遺跡	大字山田字桜ケ丸	弥生	
2	鹿新田 〃	〃 鹿新田	〃	
3	立切 〃	〃 立切	〃	
4	石風呂 〃	〃 石風呂	〃	
5	西ノ上 〃	〃 西ノ上	〃	
6	江川 〃	大字中霧島字江川		石臼
7	古江 〃	〃 古江		須恵器
8	華舞 〃	大字山田字華舞	縄文	石斧・敲石

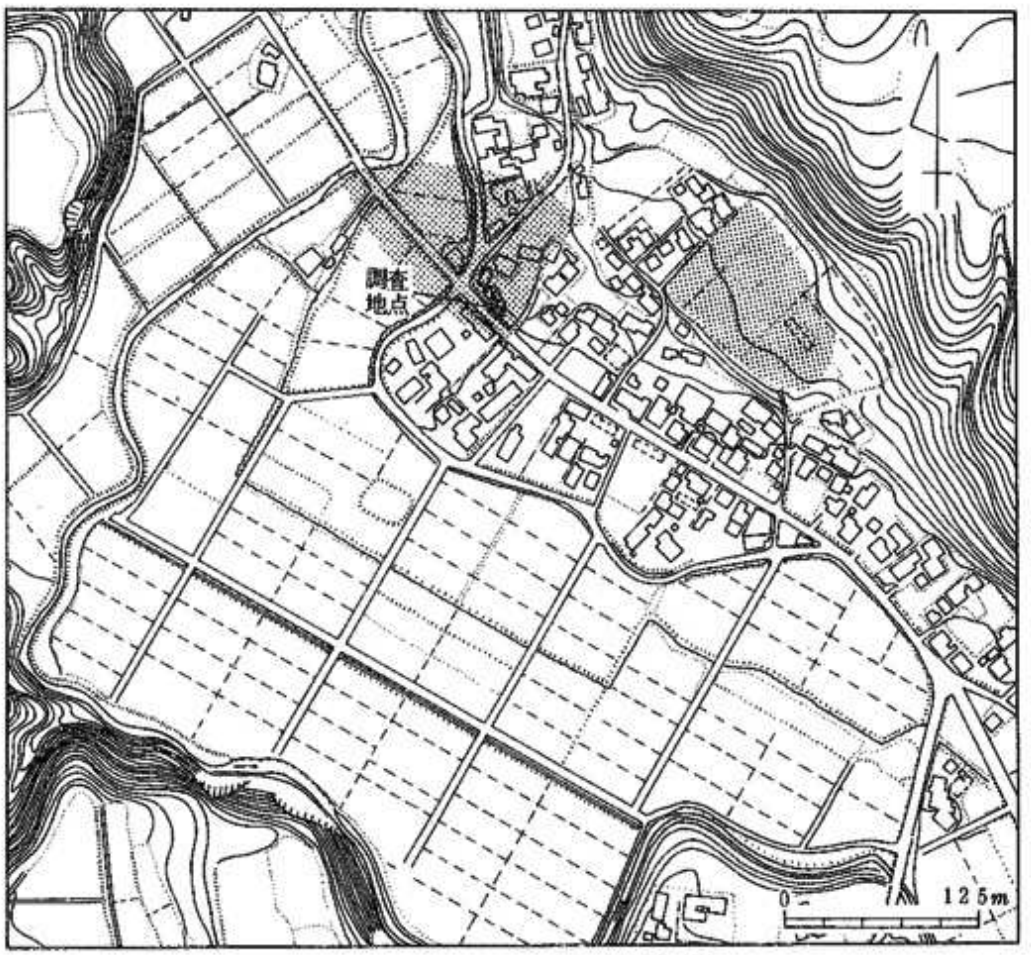
（「宮崎県史蹟調査報告書」）
（註1）

表1. 山田町内の遺跡

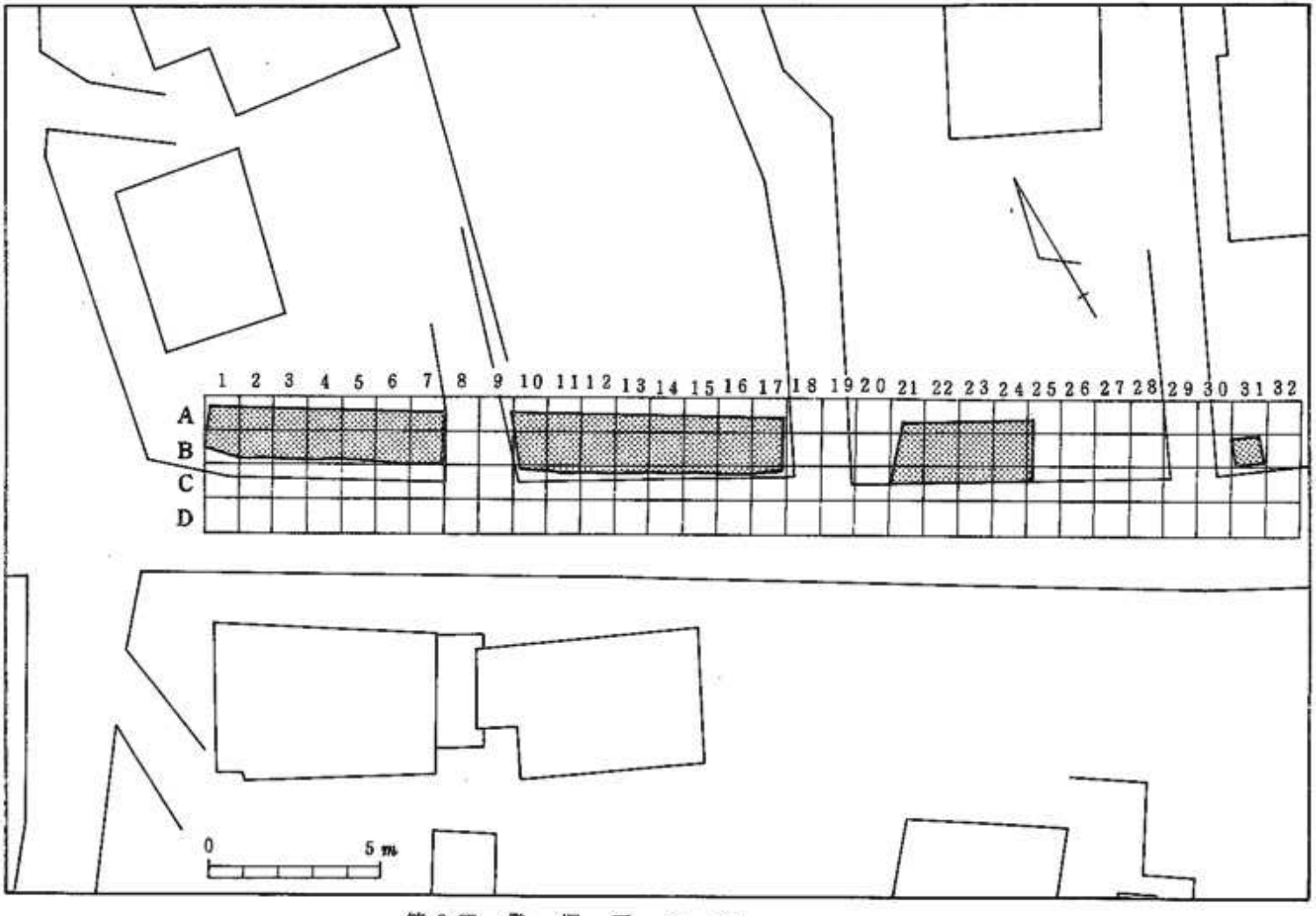
3. 調査の概要

中村遺跡は，山田町役場から，北西へ約1㎞の所にあり，町内を西から東に流れる山田川によって形成された河岸段丘上に位置する。（第2図）今回調査対象となったのは，段丘面を横切る県道の拡副部分約150㎡である。まず調査圧全体を地形によってⅠ～Ⅳ区（第3図）にわけて調査を行った所，Ⅲ・Ⅳ区は包含層の残存状態がわるく，若干の遺物は出土したものの遺構等の確認はできなかったので，Ⅰ・Ⅱ区を中心に調査を行った。

調査はまず表土を除去した後，地形にあわせて2m×2mのグリッドを組んで行った。その結果，ボラ層の上層に良好な包含層が存在し，多数の遺物の出土が見られ，またボラ層に堀り込まれた遺構が検出された。遺構としては，竪穴住居跡が2軒の他，土坑・ピットが少数検出された。また遺物としては，縄文土器・打製石斧・石皿等，縄文時代の遺物が主流であるが，Ⅲ区には布痕土器・土師器・須恵器が数点出土している。



第2図　遺跡周辺地形図


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32
A
B
C
D
0
5m

第3図　発　掘　区　全　図

4. 層　位

中村遺跡においては，Ⅰ・Ⅱ区に残存状態の良好な包含層が確認できた。本遺跡においては，この地方特有に見られるボラ層（御池ボラ）を基盤としており，ボラ層は固くしまっており，スコップでも掘り起こしにくいほどであった。調査はこのボラ層上面まで行った。

このボラ層までの基本的な層序はⅠ層～表土（耕作土）・Ⅱ層～暗褐色土・Ⅲ層～明褐色土・Ⅳ層～黒褐色土・Ⅴ層～ボラとなっている。なお，遺物包含層はⅢ・Ⅳ層である。

また，Ⅳ層は下層になるに従って固くなっておりⅣａ層・Ⅳｂ層に細分ができた。Ⅲ層とⅣ層の間に流れ込みかと思われるような，ボラ粒子を多く含んだ部分が存在したのでⅢ′層とした。

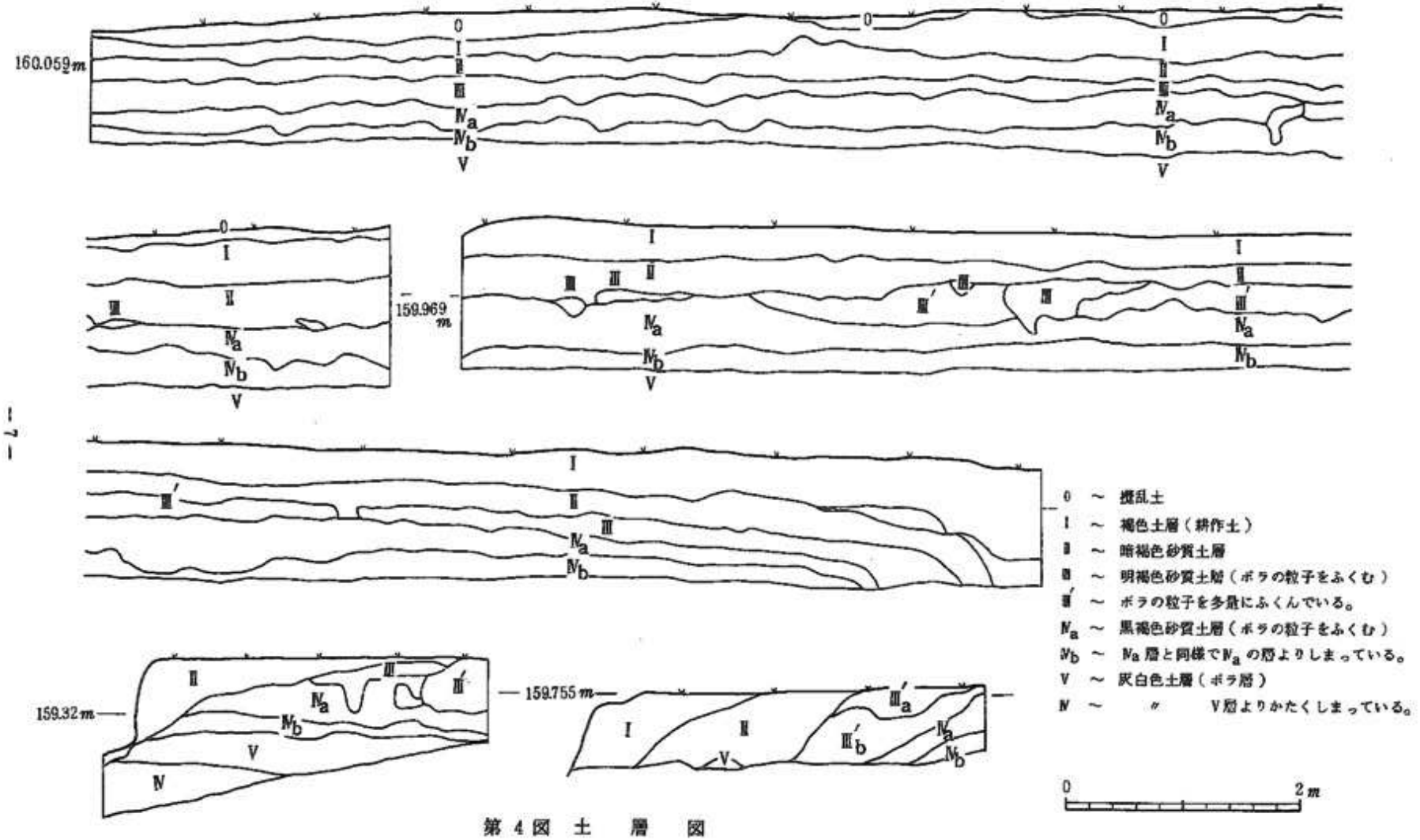
（註１）　宮崎県内務部『宮崎県史蹟調査』昭和５５年（復刻）

（註２）　文化庁文化財保護部「全国遺跡地図（宮崎県）」昭和５０年

（註３）　宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道（宮崎線）関係遺跡分布調査報告」昭和４６年

（註４）　鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅻ」１９８２

※　山田町役場『山田町郷土史』昭和４５年


160.059m
159.969m
159.32m
159.755m
0 ～ 攪乱土
I ～ 褐色土層（耕作土）
II ～ 暗褐色砂質土層
III ～ 明褐色砂質土層（ボラの粒子をふくむ）
III′ ～ ボラの粒子を多量にふくんでいる。
Na ～ 黒褐色砂質土層（ボラの粒子をふくむ）
Nb ～ Na 層と同様でNa の層よりしまっている。
V ～ 灰白色土層（ボラ層）
N ～ 〃 V層よりかたくしまっている。
0
2m

第 4 図　土　層　図

第2章　遺構と遺物

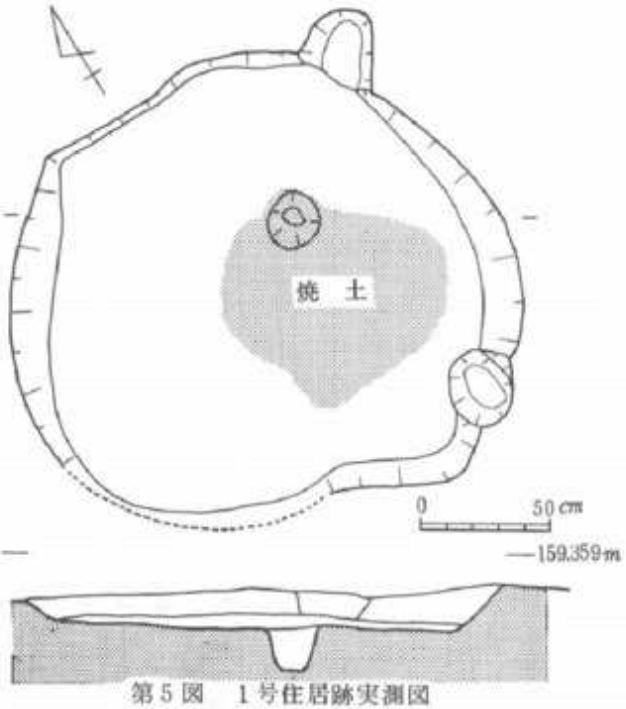
1. 遺　構

本遺跡の遺構は全てボラ層面の検出であった。遺構としては，竪穴住居跡2，土坑・ピット等が確認された。

①　1号住居跡（第5図）

a，遺　構

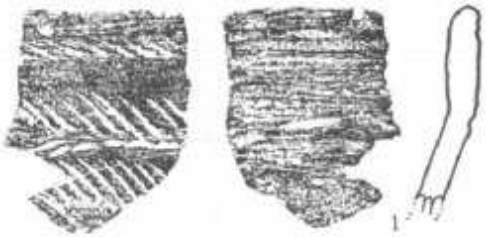
1号住居跡は，A・B－15区で検出された。平面プランは円形の竪穴住居跡である。規模は2.0m×1.9mで検出面からの深さは15cmである。住居跡内において明確な柱穴は検出できなかったが，中央部に直径20cm，深さ18cmの掘り込みがあり，その周辺には焼土とともに炭化物等も確認された。また，上層出土の土器と接合するので，遺構の掘り込み面は上層中にあったと思われる。遺物は少なく，縄文土器が数点出土したのみであった。



第5図　1号住居跡実測図

b，出土遺物（第6図）

1は外面に貝殻腹縁による施文がなされているもので，口唇部付



第6図　1号住居跡出土遺物実測図

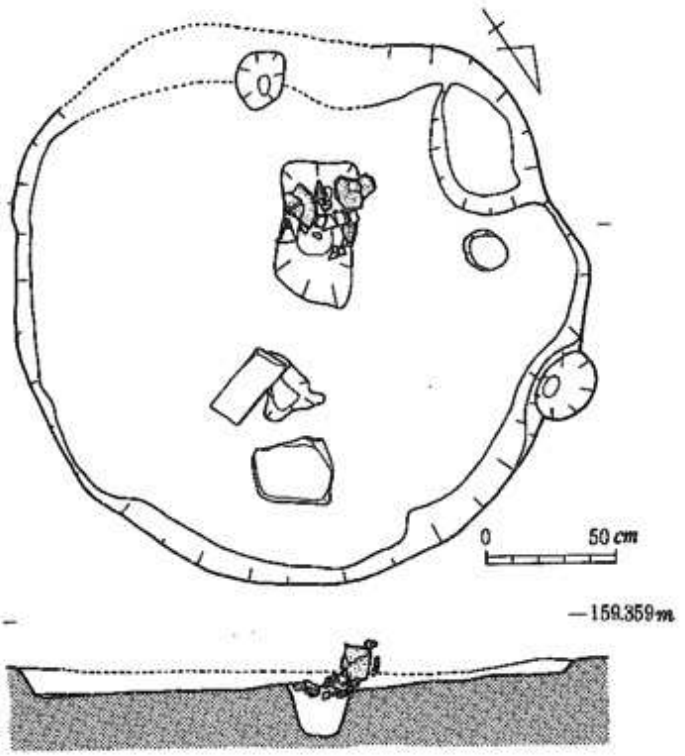
近に少さくすこし間をあけて下に2段の施文が見られる。内面には貝殻条痕が施されている。胎土には1～2㎜大の砂粒を多く含む。金雲母を多く含んでいる。焼成は良好で，色調は外面は暗茶褐色・内面は茶褐色を呈している。

2は深鉢の胴部である。外面はヘラミガキされている。胎土はよく精選されており焼成も良好である。色調は外面は明褐色・内面は暗褐色を呈している。

② 2号住居跡

a，遺　構

2号住居跡は，A・B－14区で検出された平面プラン円形の竪穴住居跡である。規模は直径2.2mで検出面からの深さは10cmである。住居跡内に明確な柱穴は検出できなかったが，中央部に23cm×55cmで深さ17cmの落ち込みがありその南側には，焼けた板状の石が配列してあり，炉と想定される。遺物も1号住居跡より多く，縄文土器の他に石皿・石斧等も出土している。



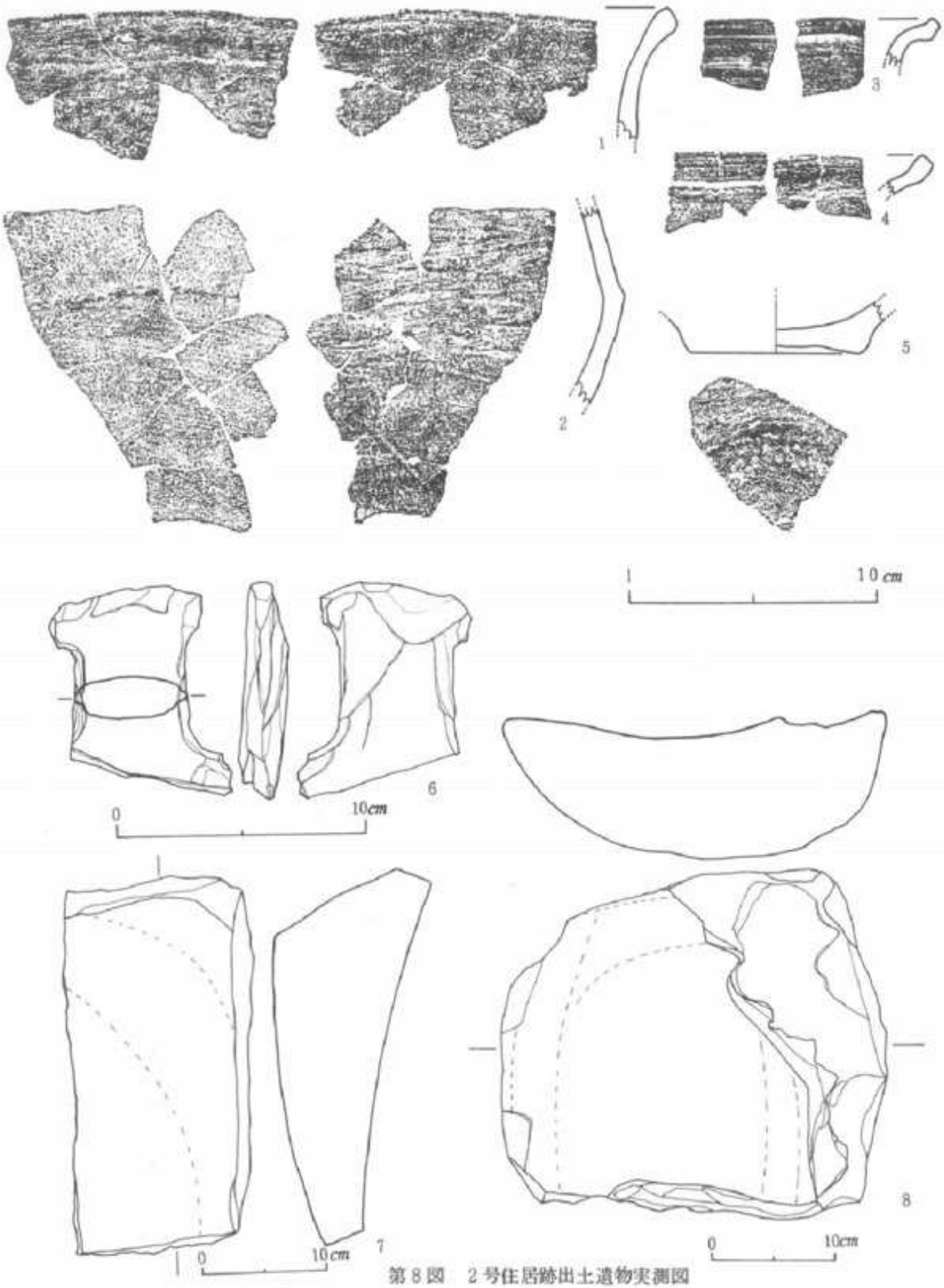
第7図　2号住居跡実測図

b，出土遺物

・　土器（第8図1～5）

1・2は深鉢の口縁部および胴部片である。1は若干外反する口縁で，ナデ調整が行われている。胎土には黒雲母を含んでおり，焼成は普通である。色調は外面は暗褐色・内面はくすんだ褐色を呈している外面にはススが付着している。2は胴部でくの字に屈曲して底部に至るもので，ていねいなナデ調整が行われている。胎土には，石英・黒雲母を含んでいる。焼成は良好である。色調は外面は褐色～暗褐色・内面は黒褐色を呈しており，外面上半にはススが付着している。

3・4は，浅鉢の口縁部である。3は口唇部下に一条の沈線を有するもので，外面はナデ内面には部分的にミガキが行われている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈す。4は一旦外反して立上がるもので，内外面とも研磨されており，胎土もよく精選されてお



第8図　2号住居跡出土遺物実測図

り，焼成は大変良好である。色調は黒褐色を呈している。

5は底部である。若干の凹み底を呈し，若干の立上りを有し外反するもので，ナデ調整が行われている。胎土には黒雲母を含んでいる。色調は外面・淡褐色，内面は黒褐色を呈している。焼成はやや良好である。

石　器

(1) 石斧（第　図1）

刃部を欠損しているが，基端部のはる分銅形石斧の一種とみておきたい。柄の着装部に両辺から抉りが入れられ，刃部にかけて強く張り出す部位までが確認出来る。

現存長8.5cm，基端部幅6.2cm，抉入部幅4.6cm，最大厚1.8cmを計る。表面の風化著しく確実な石質は不明である。

(2) 石皿（第8図7・8）

2は，右側面に原形をとどめるが，長方形状に左側面を欠損した石皿である。長軸幅30.4cm，現存最大幅14.1cm，最大厚11.5cm，最小厚3.6cmを計る。石質は安山岩で，ゆるやかに磨研のかかった皿部の面積は約360cm²である。

3は，縁辺部をかつより欠損しているが，略台形状を呈する石皿である。長軸31.2cm，短軸27.8cm，最大厚10.6cmを計る。現存する磨研のかかった皿部の面積は約500cm²である。石質は2と同じく安山岩である。

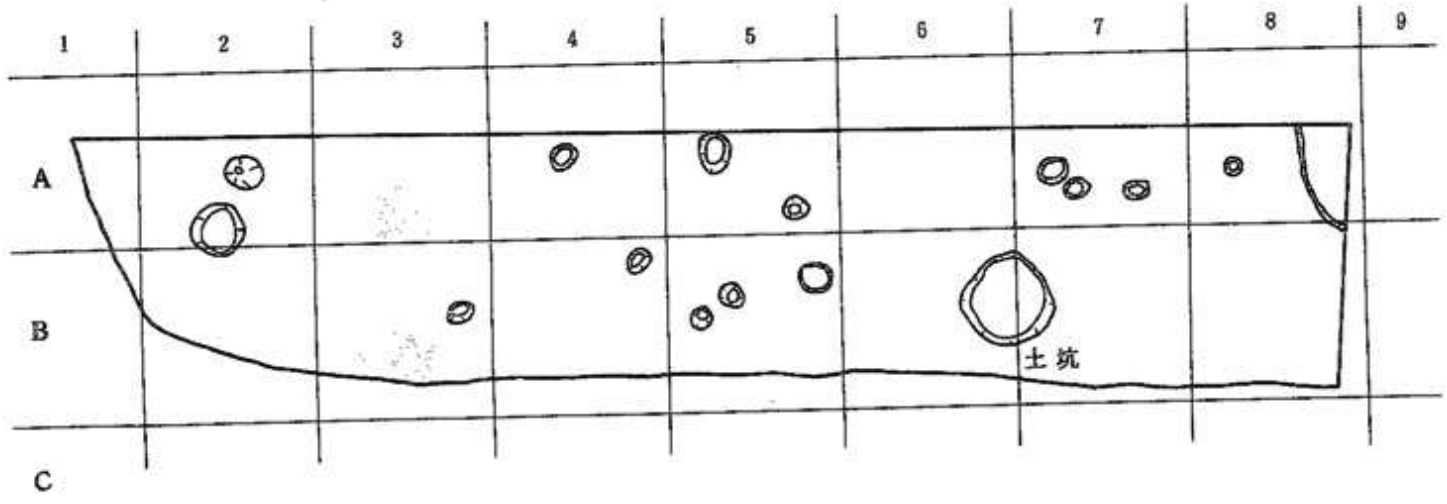
③ 土　坑

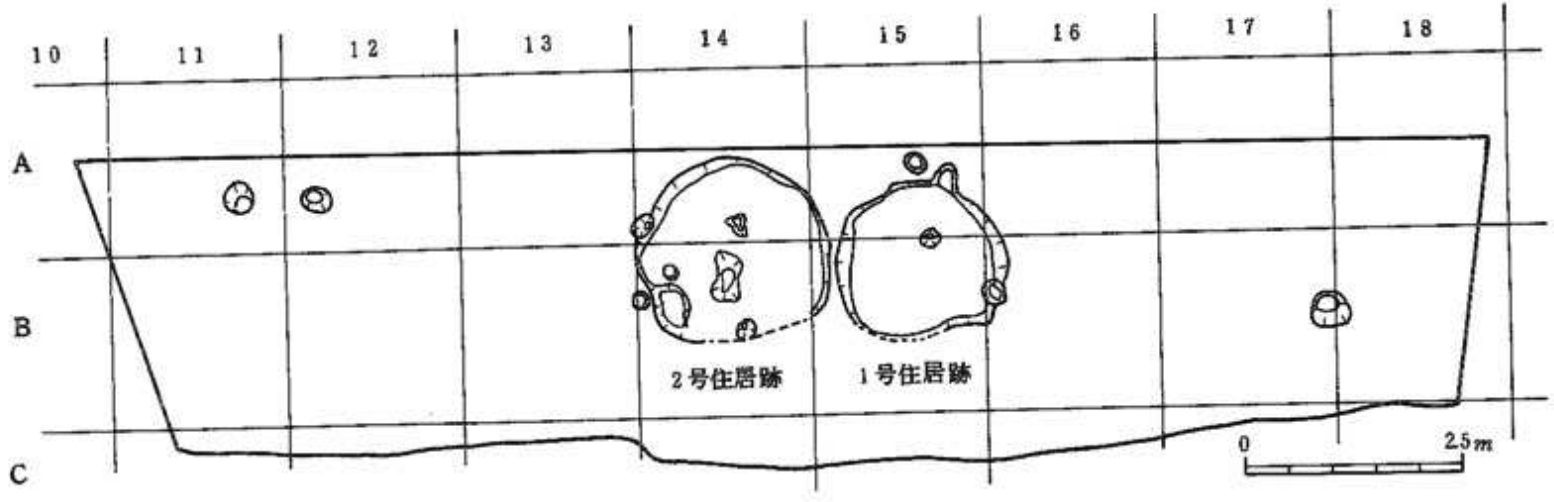
A・B－6・7区で検出されたもので，平面プランは円形である。規模は直径約1mで検出面からの深さは20cmである。出土遺物は少なく，縄文土器数点が出ましたのみであった。その中で特徴的なものが（第9図）で貝殻腹縁文を外面に施したもので，内面は貝殻条痕が行われている。胎土には2～3mmの小石を含み，こまかい石英粒も含んでいる。焼成は良好である。色調は暗茶褐色を呈している。

第9図　土坑出土土器実測図

④ ピット

ピットは，Ⅰ・Ⅱ区で十数ヶ所検出されたが，調査区が狭ったため，建物跡等の遺構に関連したものかどうかは確認できなかった。





第10図 遺 構 分 布 図

2. 遺　物

(1) 縄文時代の遺物

a　土　器

中村遺跡出土の縄文土器は，深鉢・浅鉢が主体を占めている。出土層位は，Ⅲ・Ⅳ層であるが，Ⅳ層が大半をしめているので，口縁部・胴部・頸部の特徴により形態的に分類を行った。尚，土器については観察表を別に作成した。

深鉢A，磨消縄文を文様帯として持つもの。波状口縁で，頸部がしまり，胴部が球形にふくらむものである。（１０－２１）

深鉢B　口縁帯を有し，口縁帯に沈線または凹線を施すもの。

B－１　頸部が外反し、口縁部が内傾または直立して立上るもの。口縁部内面に明瞭な段を有する。口縁部に２条の凹線を有する。（２２・２３）

B－２　B－１と同様の形態を有し，口縁部に数条の沈線を持つもの。（３０・３３～３６）（４２・４４～４６・４９）

B－３　頸部からの立上りがゆるやかになり，口縁部内面に段を形成しない。口縁部の幅が広くなるものもある。（２９・３１・３２・３８・４１・４３・４７・４８・５０・５９）

B－４　頸部からの立ち上りがなくなるもの（５６・５７・６０）

B－５　頸部がゆるやかに外反し，口縁部が肥厚し，口縁部に凹線を施すもの。胴部にも凹線を施すものもある。口縁内面の形態により２つに分けられる。

a－口縁部内面に明瞭な段を有するもの。（５１・５２）

b－口縁部内面の段が退化しているもの。（１４・５３～５５）

B－６　波状口縁で口縁帯に沈線が施されているもの。（６１）

B－７　山形突起を有するもの。（２８）

B－８　口縁部が肥厚し，口縁外面に凹線・凹点を施すもの。（２７）

深鉢C　口縁帯を有するか，または口縁部が肥厚するもので文様を持たないもの。

C－１　内面にゆるやかな立ち上りをもつもの。（７０・７２）

C－２　ゆるやかに外反しながら，そのまま口唇部に至るもの。（６２・６５～６８）

C－３　内傾するもので，口縁帯は角張っている。（６９・７１）

C－４　内弯しながら外反するもの。

深鉢D　口縁帯を有さないもの，口縁部は若干外反するが，形態差が顕著でないので，胴部の形態で分類を行った。（７３～９８）

D－１　胴部で明瞭な段を有するもの。（７６・８２～８７）

D－2　段を有さずゆるやかにふくらむもの。（７９・８８）

D－3　胴部に沈線を施すもの。（８９～９４）

深鉢E　頸部で一旦くびれ，内　ぎみに外反するもの。（９７・９８）

深鉢F　文様帯をもたないで波状口縁となるもの。（９６）

深鉢G　貝殻腹縁文を有するもので，内面には貝殻条痕文が施こしてある。（１～８）

深鉢H　口縁部が肥厚して，ヘラでX状の文様を施してあるもの。（９）

(2)　浅　　鉢

浅鉢A　磨消縄文が施されたもの。（９９）

浅鉢B　口縁部が直立ないしは若干外反ぎに立上がる。口縁部に沈線ないし凹線が施されているもの。（１００～１０４）

浅鉢C　B類より立上りがゆるやかになるもの。（１０６・１０７）

浅鉢D　頸部がくの字に屈曲して，口縁部が立上る。山形突起を有す。（１０５）

浅鉢E　頸部がなくなり，口縁部で短く屈曲するもの，内面に一条の沈線を有する。(108・109)

浅鉢F　頸部が大きく外弯して，口縁部が立ち上るもので，口縁部に１～２条の沈線を有するもの。（１１０～１１６・１１８・１１９）

浅鉢G　口縁部が短く外反するもの。（１１７）

浅鉢H　口縁部に屈曲がなく，そのまま底部から直行するもの。（１２０）

(3)　底　　部

底部A　充実した底部を有するもの

A－1　一旦上方に立ち上り胴部へ続くもの。（１２１・１２３・１２５・１２６）

A－2　そのまま胴部へ続くもの。（１２２・１２４）

底部B　一旦内傾して折り返し胴部へ外反するもの。（１２７～１３０）

底部C　明確な上げ底をもつもの

C－1　一旦上方に立ち上り胴部へ続くもの。（１３１・１３２）

C－2　そのまま直線的に立ち上るもの。（１３４～１３６）

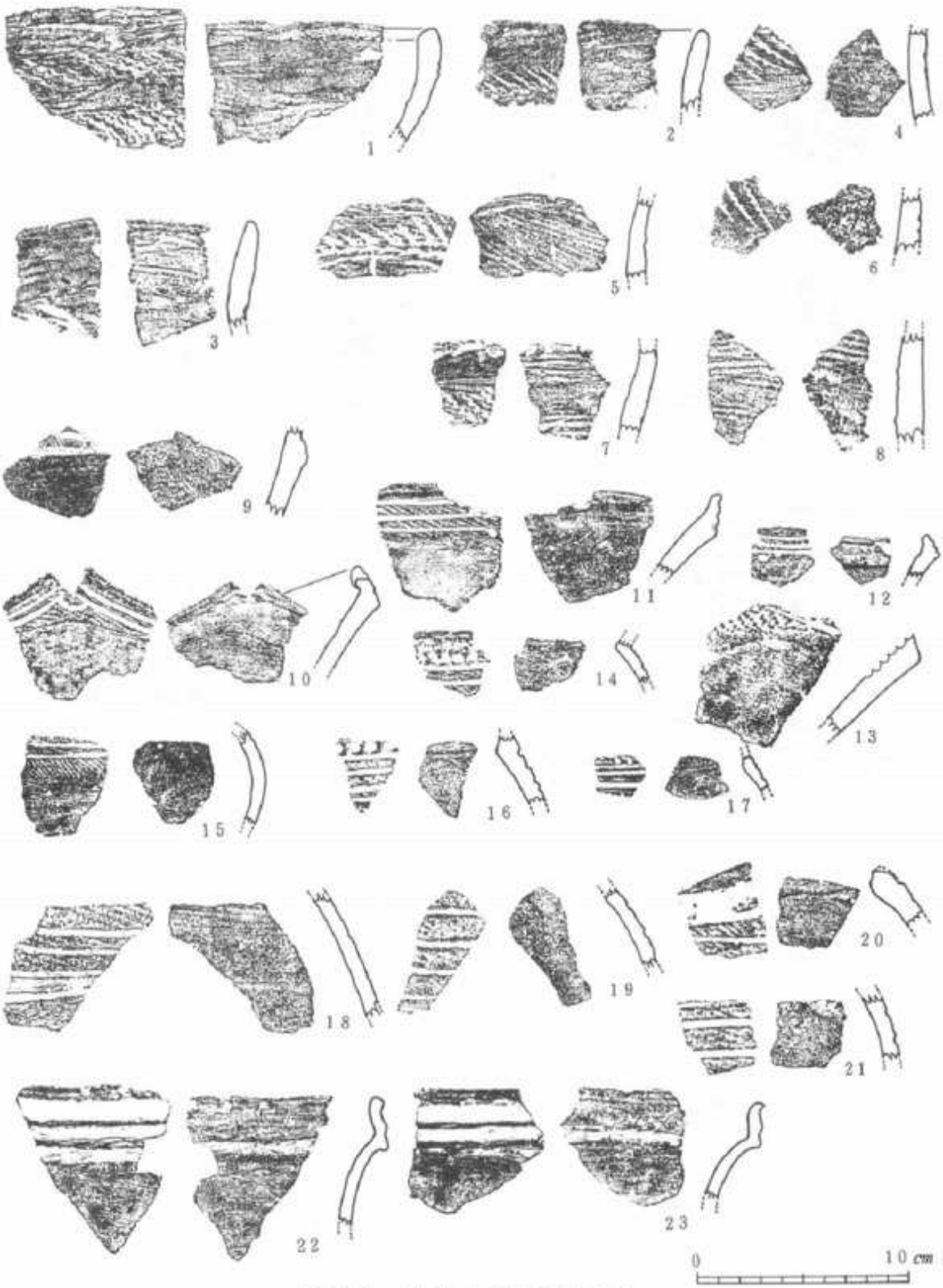
底部D　凹み底を有するもの。

D－1　一旦上方に立ち上り胴部へ続くもの。（１３３）

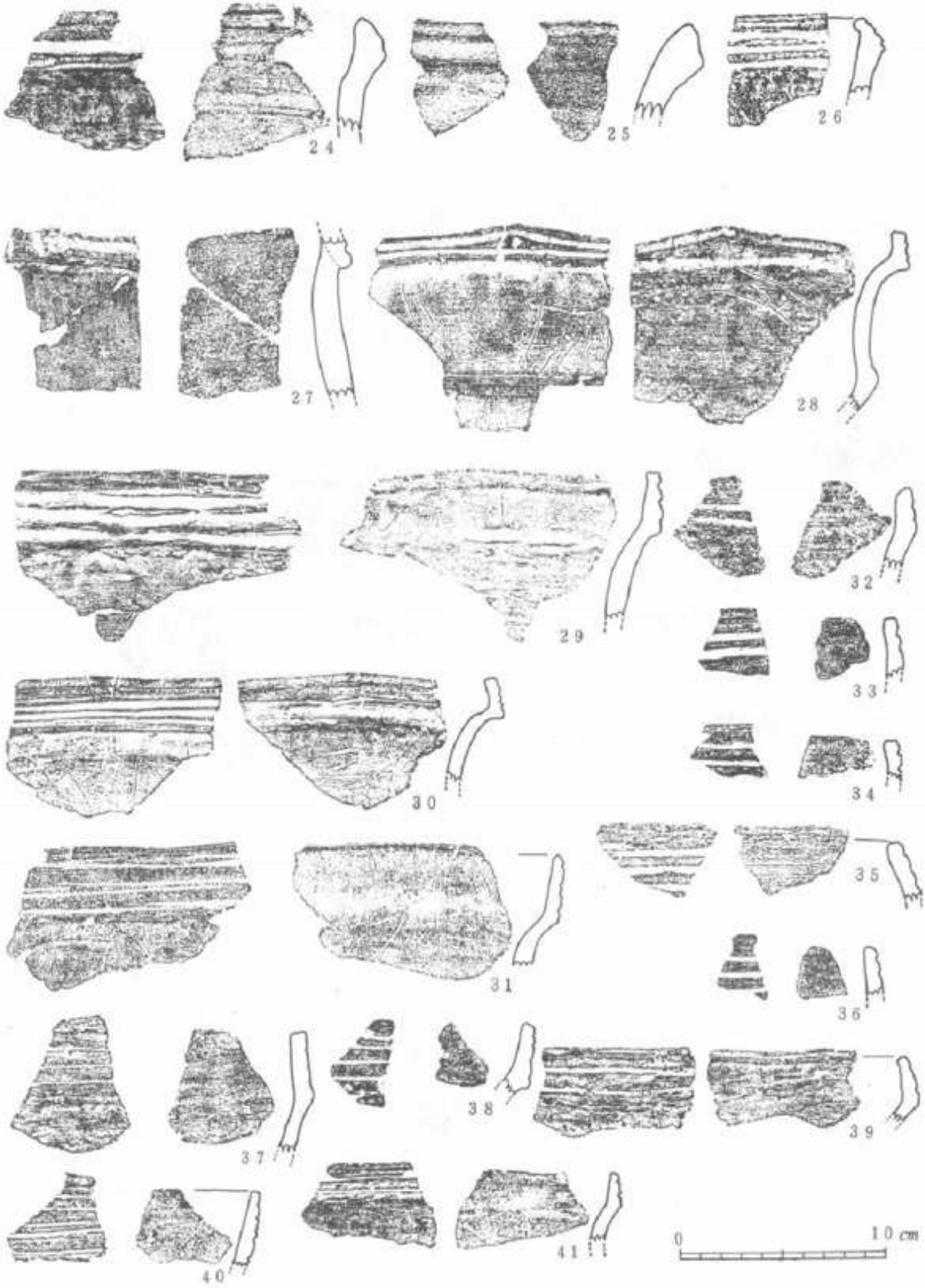
D－2　そのまま直線的に立ち上るもの。（１３７～１３９，１４２～１４６）

D－3　ゆるやかな弧状をなして立ち上るもの。（１４０・１４１）

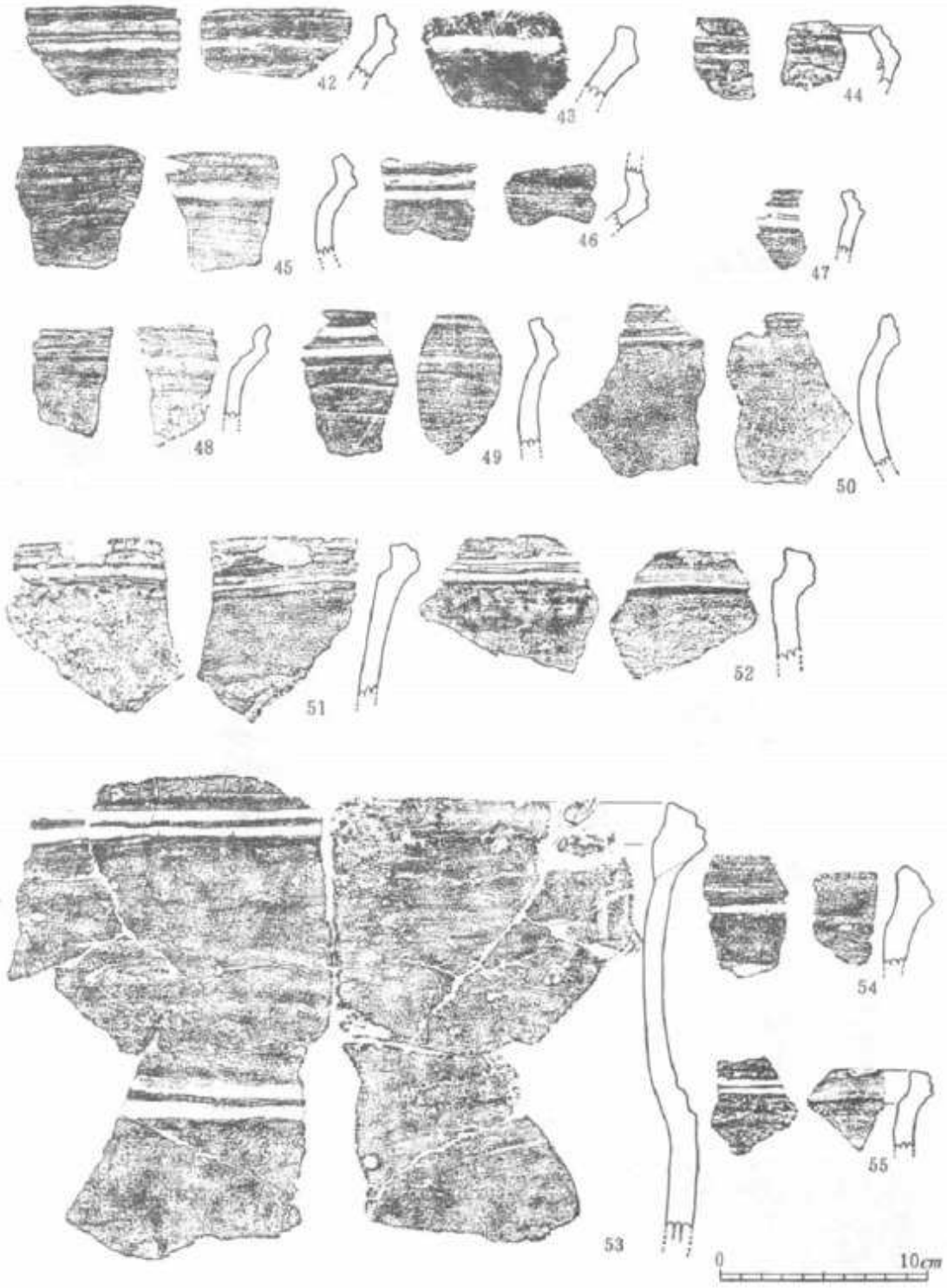
その他，高杯形土器の脚台（１４７）が１点出土している。



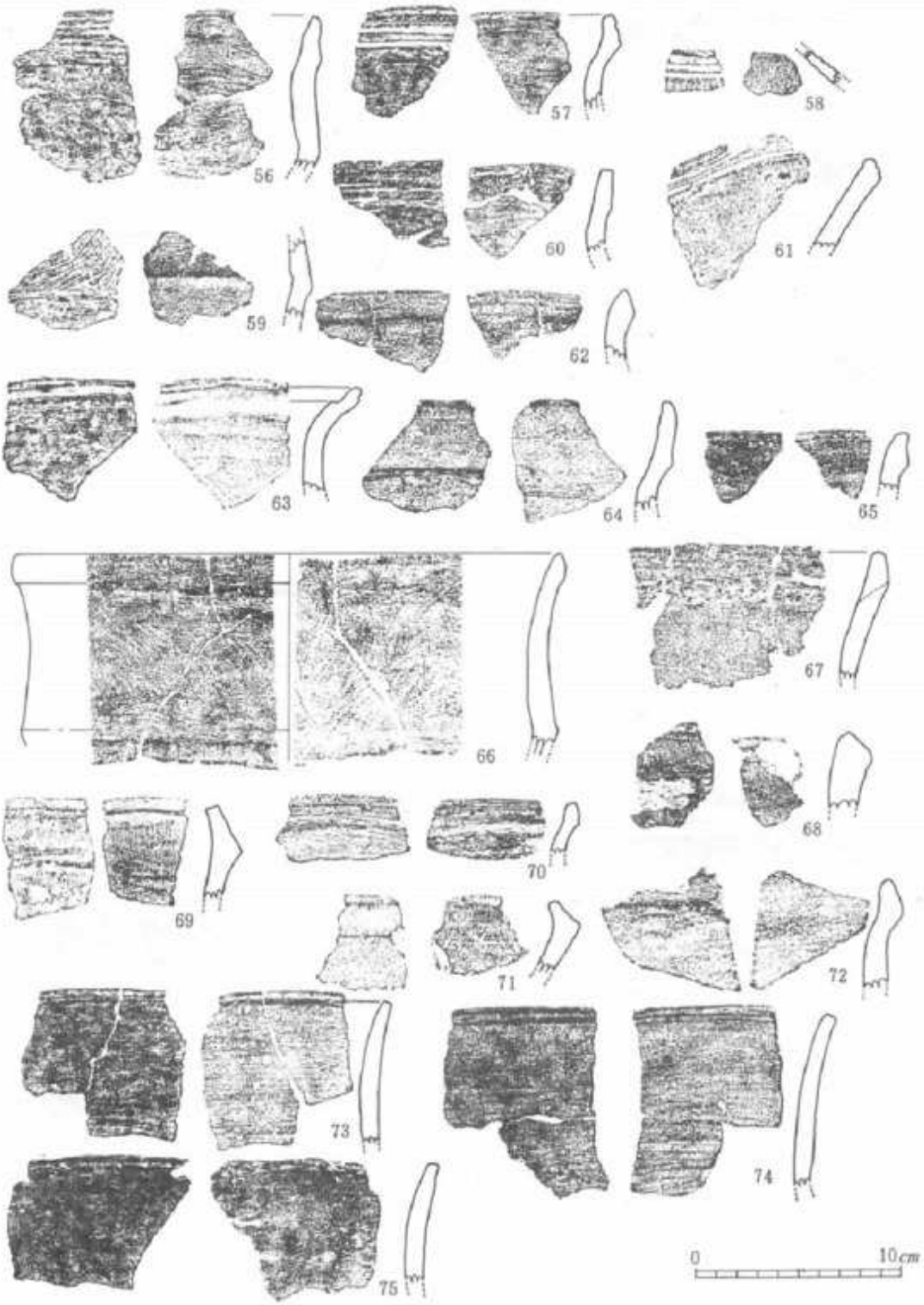
第11図　縄文土器実測図 (1)



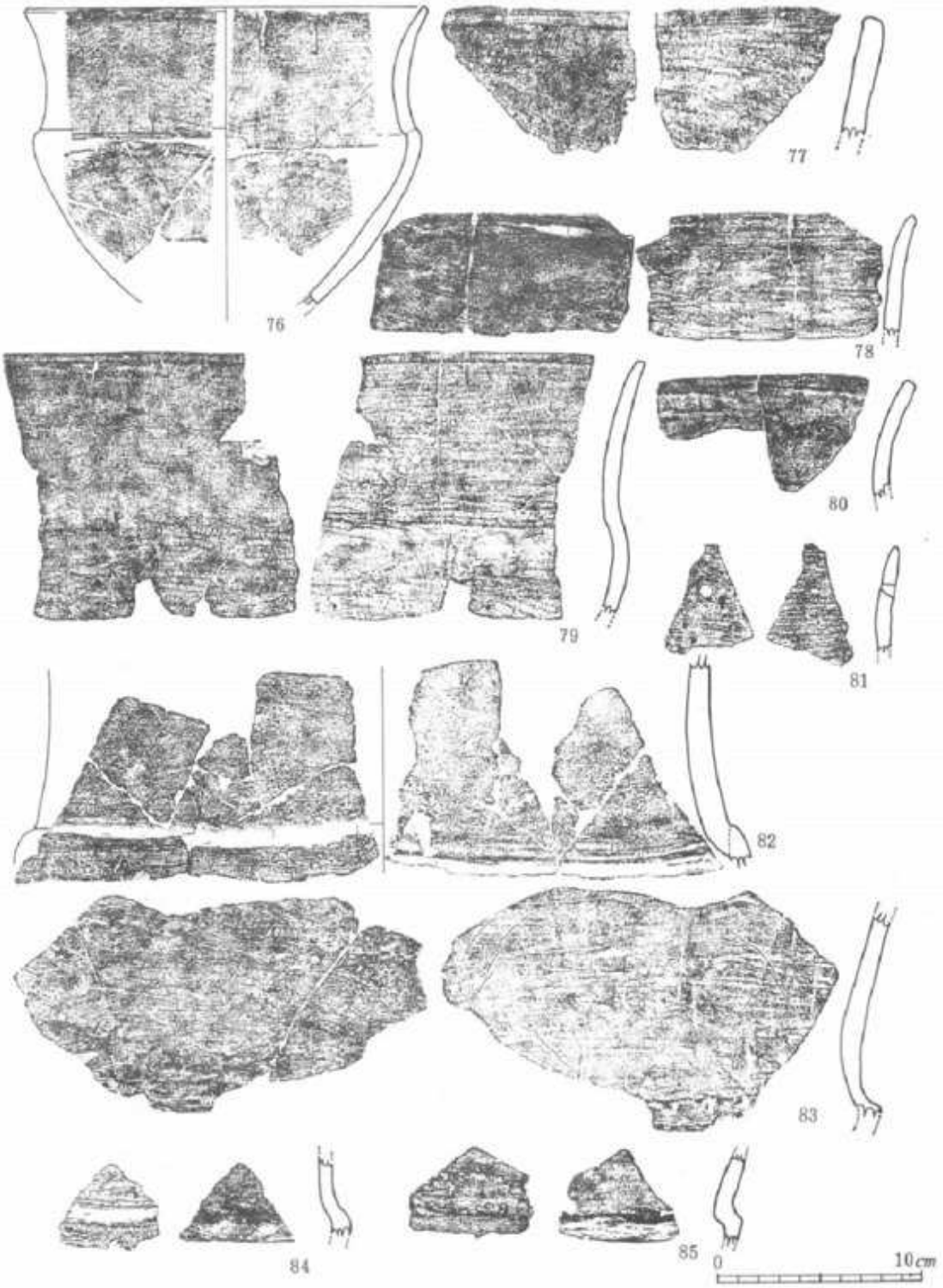
第12図　縄文土器実測図 (2)



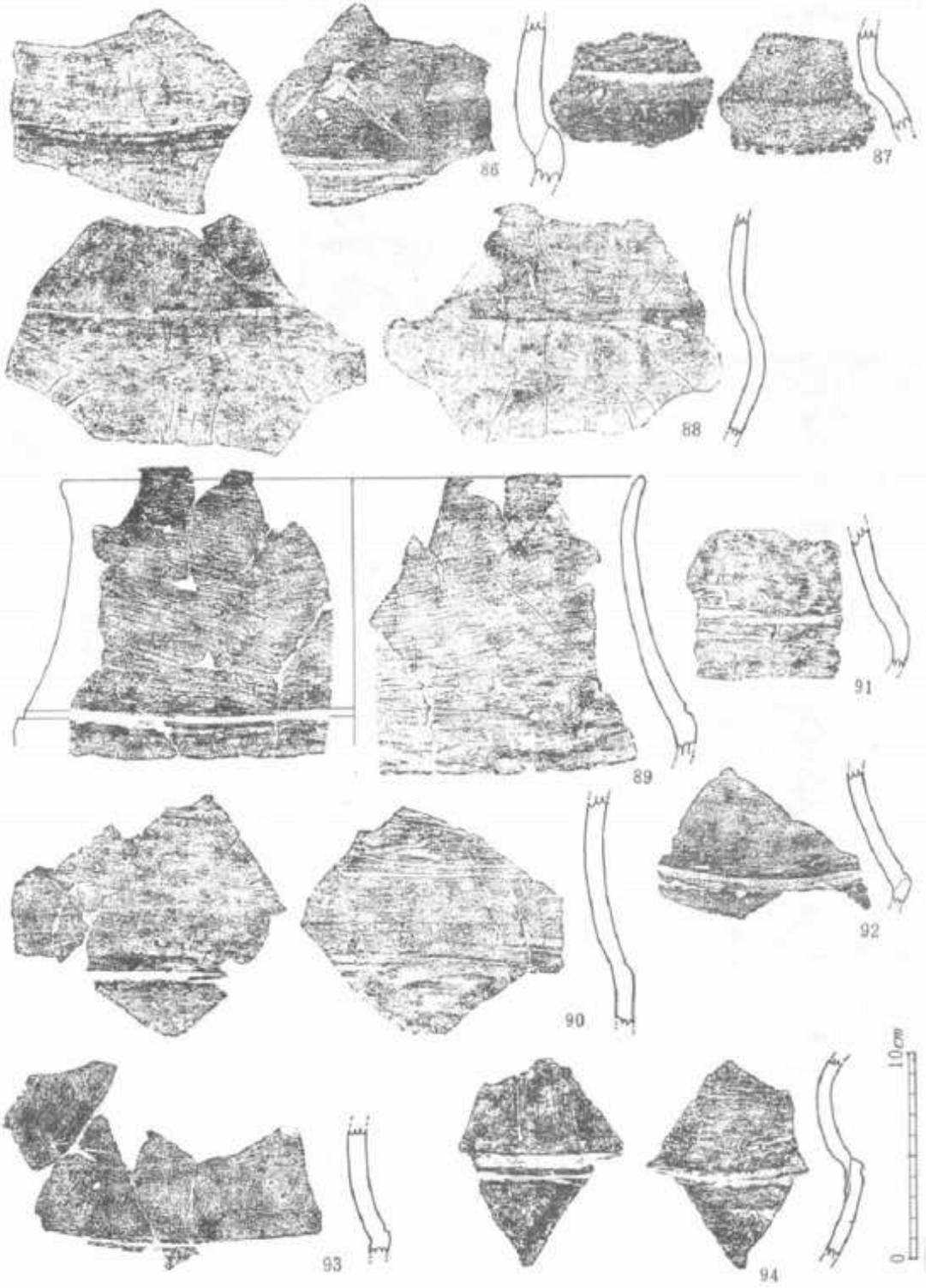
第13図　縄文土器実測図(3)



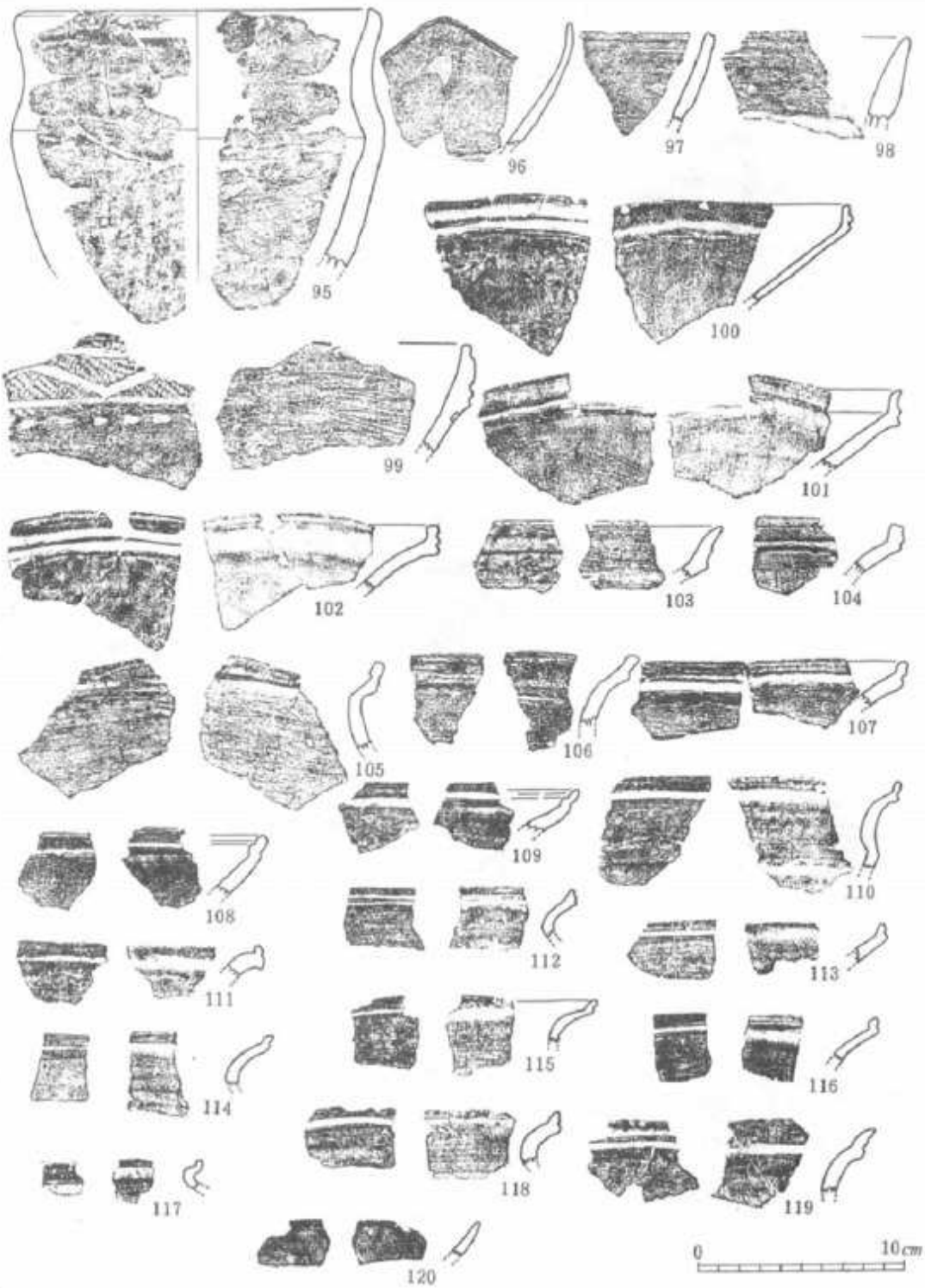
第14図　縄文土器実測図(4)



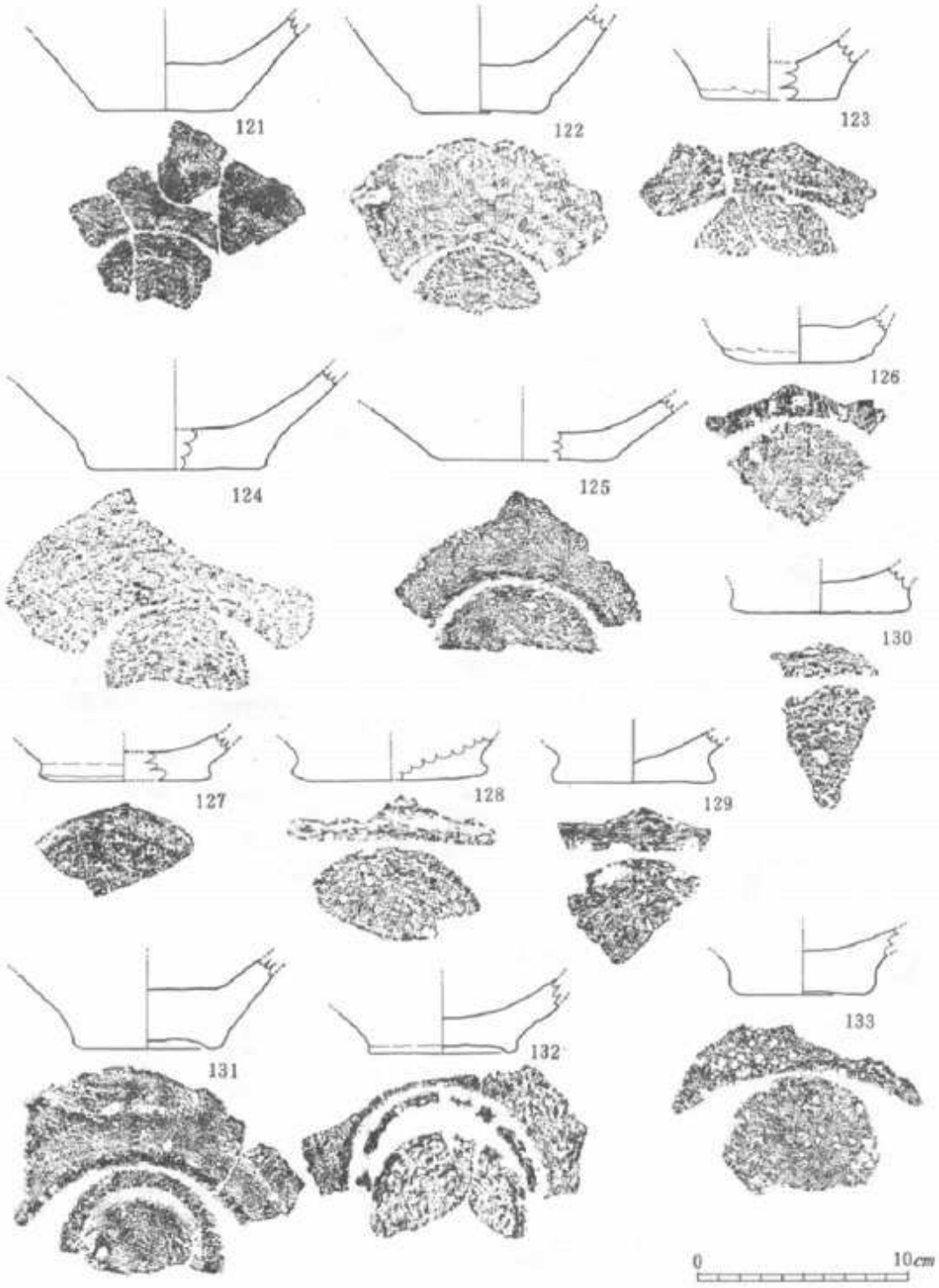
第15図　縄文土器実測図(5)



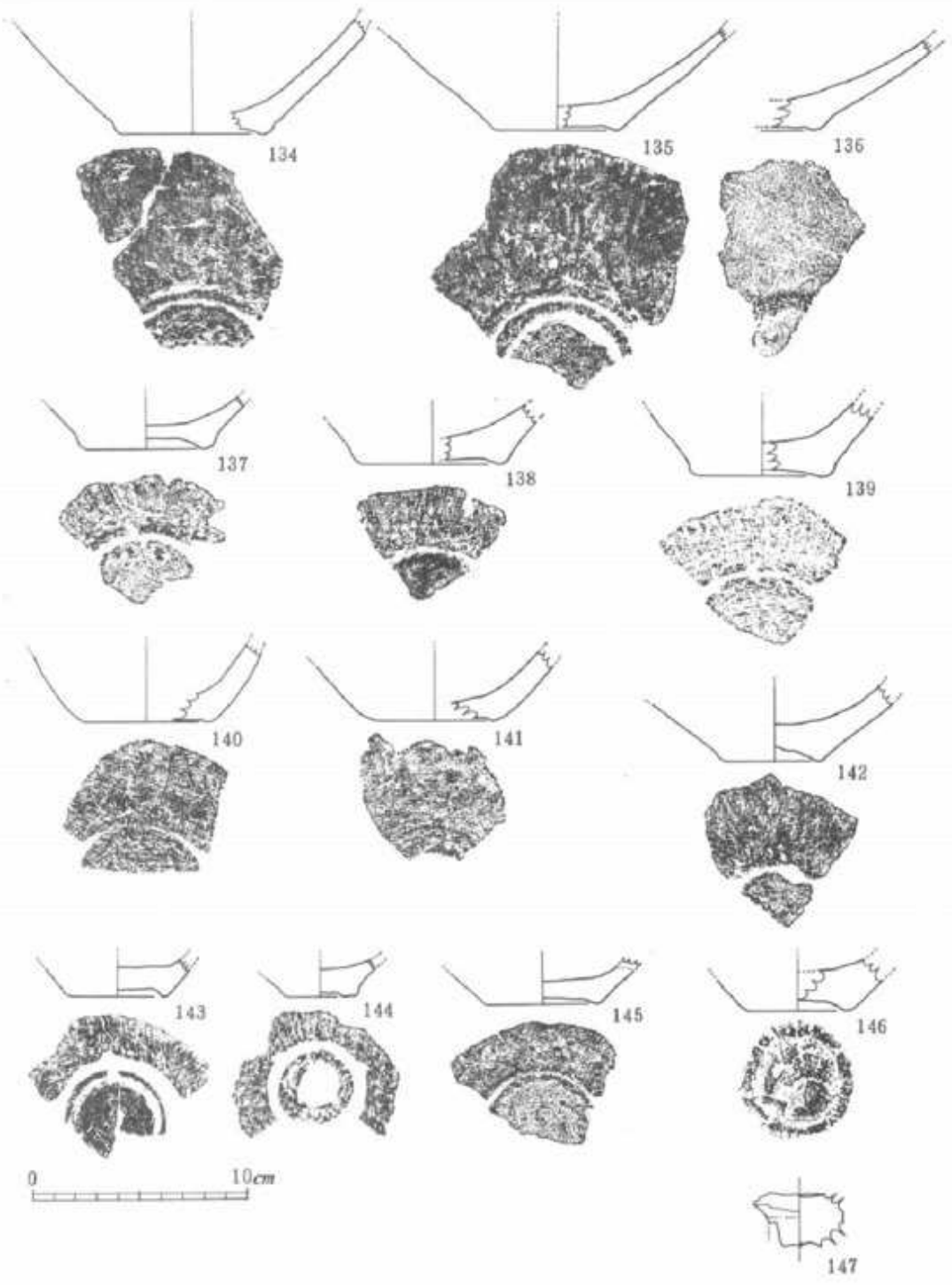
第16図　縄文土器実測図(6)



第17図　縄文土器実測図(7)



第18図　縄文土器実測図(8)

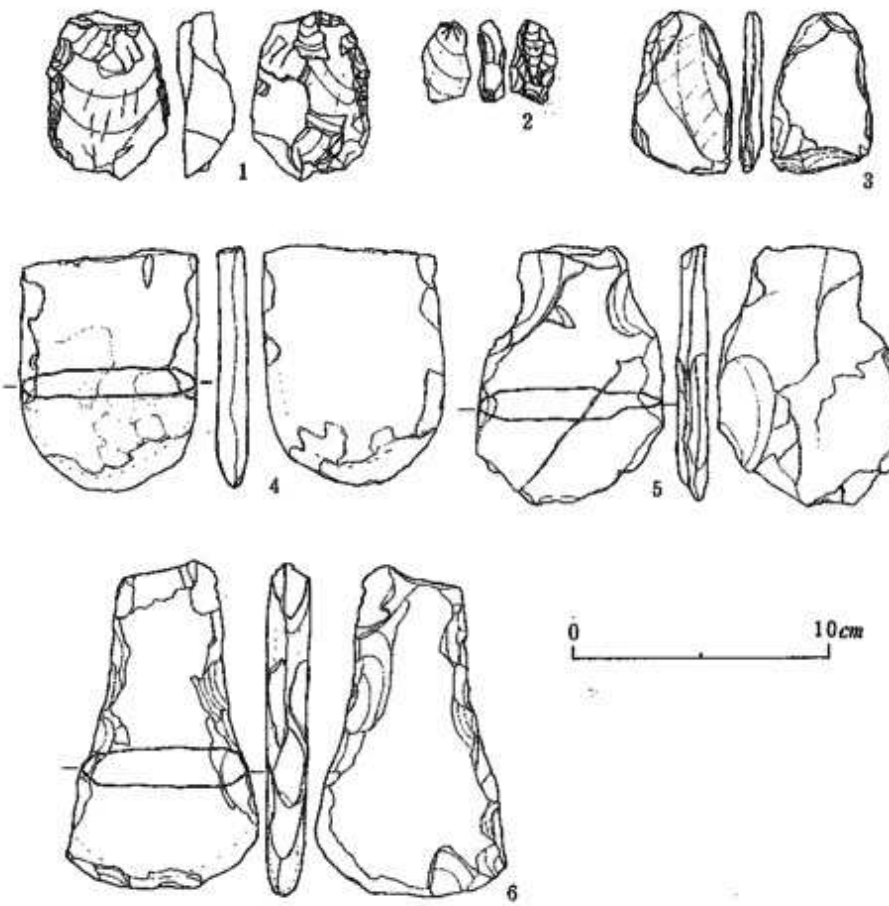


第19図　縄文土器実測図(9)

b 石　器

包含層中から検出された石器には，多くの石材の剥片を含み，スクレイパー，石斧，石皿片，磨石，凹み石等がある。斜面地の端部に位置した調査区では，確実な層位の確定が行い難く，また形状の明瞭なものも少ないため，ここではスクレイパーと石斧について記述する。

1はチャート製のスクレイパーである。同質と思われるチャートの剥片も多く検出されており，斜面地の上部など周辺地に，このてのスクレイパーが伴うにふさわしい遺構などが存在するのであろう。片面に大きく剥離面を残し，縁辺に細部剥離が加えられている。一方の面は，大きくは4つの剥離により中央部に稜が出来，縁辺の細部剥離は片辺に限られる。長軸6.5 cm，短軸4.6 cm，最大厚9 cmを計る。



第20図　出土石器実測図

2は黒曜石製の剥片石器で，掻器あるいは削器として使用出来る。縦長の剥片を使用し，片面は大きく3つの縦長の剥離が加えられている。長軸3.2cm，短軸1.9cm，最大厚0.9cmを計る。

3は粘板岩質の石材を用いた扁平な打製石斧の一種とみておきたい。刃部と思われる部分を欠損しているが，長軸にそっての縁辺に刃を作り出した状態はみられない。従って，打製石庖丁等刃部を横位にもつ石器とは考えない。現存長6.2cm，最大幅3.9cm，最大厚0.9cmを計る。

4は表面の風化が著しいが短冊形の打製石斧とみられる。磨滅著しく確実ではないが，安山岩系の石材を用いている。基部を欠き現存長9.3cm，最大幅6.8cm，最大厚1.2cmを計る。

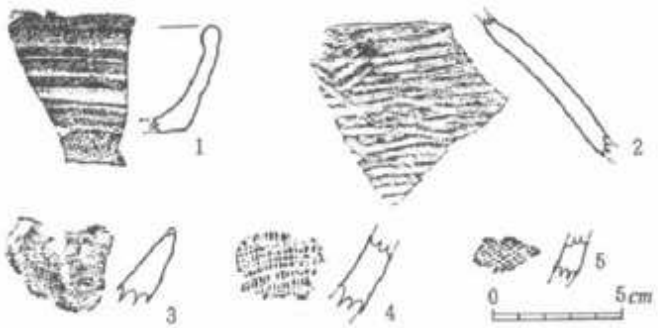
5はやや不整形の撥形の打製石斧である。石質は表面風化のため不明である。現存長10.1cm，最大幅7.3cm，最大厚1.2cmを計る。

6は完形の撥形の打製石斧である。現長12.8cm，基部最小幅4.1cm，刃部最大幅7.2cm，厚さ1.5cmを計る。刃部は磨滅し鈍化している。石質は安山岩である。

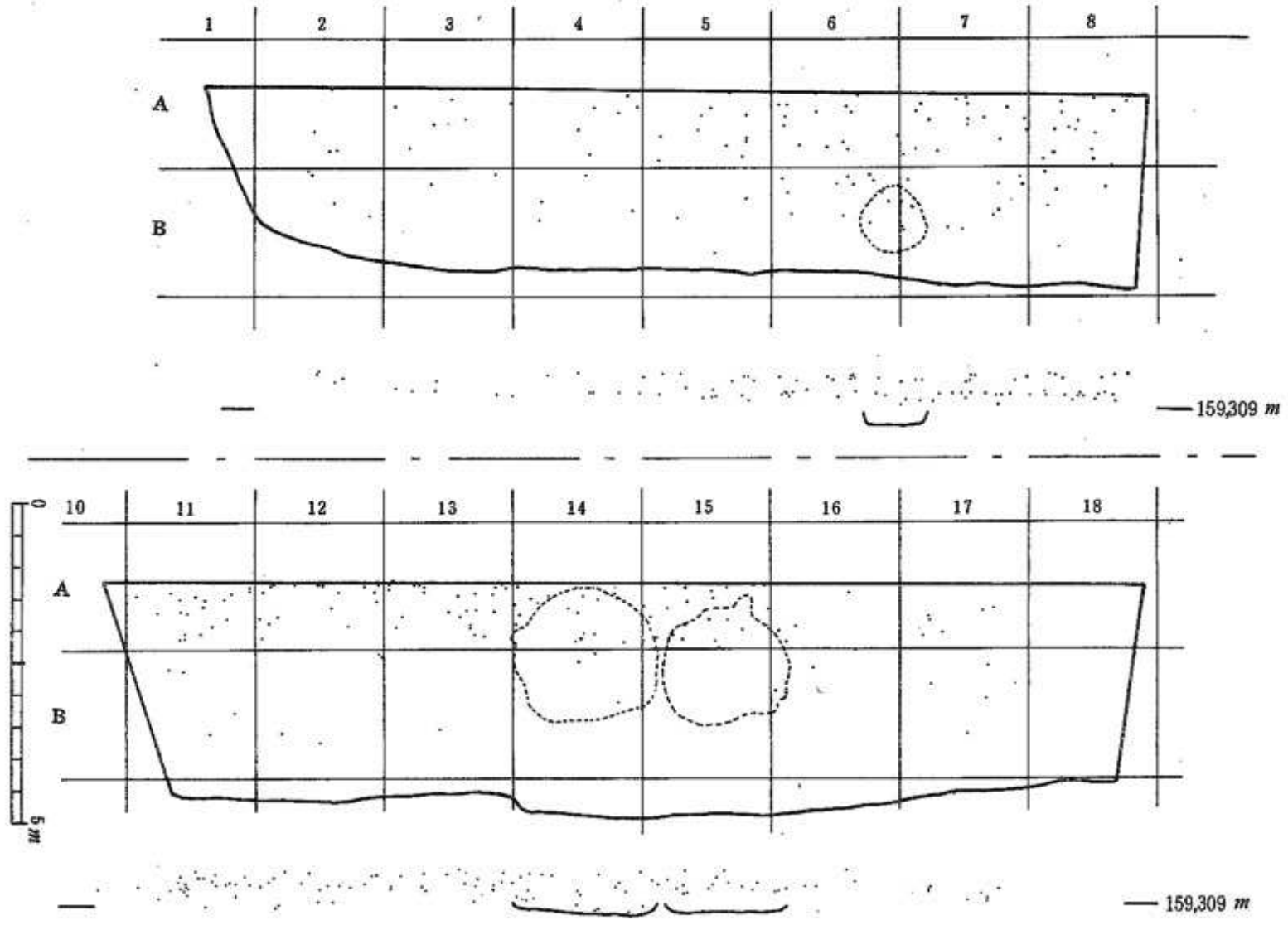
2　その他の出土土器

1は土師器の杯である，底部から明瞭な立ちよりを示す。口縁部が丸味を帯びて，内側に肥厚するものである。調整は内外面ともヨコナデである。色調は淡茶褐色を呈し，胎土は精選されており，焼成は良好である。2は須恵器で，外面には叩き目が入るが内面には明瞭な痕跡は見られない。色調は灰白色を呈す。胎土は精選されており，焼成は普通である。3～5は布痕土器である。3の布目は細いが他のものは目が荒くなっている。色調も3は淡茶褐色を呈しているが4.5は茶褐色を呈す。胎土は3は4.5に比べると精選されておいるが，風化が進んでいるので焼成についての差は不明である。

これらの1～5の土器はⅢ区より出土したものである。



第21図　その他の出土器実測図



第22図 遺物分布図

④ 小　結

以上の様に分類を行った土器を，出土状況を考慮しながら整理を行ってみたい。

まず深鉢を見るとA類は磨消縄文を施文するもので，西平式土器の系統を引くものである。B類～D類は，それに続く黒色磨研系の土器群であり細分が可能である。代表的なものではB－1・B－6・D－1は三万田式土器，B－2・B－7・D－2・D－3は御領式土器に相当すると考えられる。またB－3・B－4は御領式土器の系統を引くが，形式的にやや後出する土器群で，晩期初頭に相当すると考えられる。特に59は1片だけの出土ではあるが，口縁部が外反し細線で施文するタイプで，熊本県・中林遺跡出土土器(註1)や大分県・宮地前遺跡採集土器(註2)の中に類似と思われる土器が存在し，滋賀里系の土器(註3)の可能性が考えられる。

またB－5類は本遺跡で特徴的に見られる土器であり，口縁部に2～3条の凹線，胴部に2条の凹線を引くもので，御領式土器の系統を引くものであろうが，やや厚ぼったさを感じる土器である。この土器群は，出土状況から見てⅣ層を主体に出土する（a）とⅢ層を主体に出土する（b）とに細分でき，形態的にも内面に明瞭な段を形成する（a）→内面の段が消失し凹みになるもの（b）という流れが見られる。時期的には晩期初頭に位置付けられると考えられる。

G類土器は南九州で見られる貝殻腹縁文を施文した市来（下弓田）式土器の系統を引くものであるが，市来式特有の口縁部肥厚は見られない所から，草野式か，それより後出する土器群であろうと思われる。

H類土器は1片の出土であるが，熊本県北久根山遺跡出土土器の第一類C(註4)とされたものに類似しており，北久根山式の系統を引くものと考えられる。

次に浅鉢を見ると，A類は深鉢同様磨消縄文を施文するもので，西平式土器の系統を引くものである。B～F類に深鉢と同じ流れで，黒色磨研系の土器であり細分される。B類は三万田式土器，C～D類は御領式土器に相当すると思われる。E・F類は，いわゆる精製の黒色磨研系の土器と言われるタイプで，晩期初頭に位置付けられると考えられる。本遺跡においては，主にE類はⅣ層，F類はⅢ層から出土するという状況が見られたので，E類→F類への流れが考えられる。

底部は形態的にA～D類に分けることができるが，今回の調査では，口縁部から底部まで判明できる土器が出土しなかったため，時期的な細分は不明であるが，前述した深鉢・浅鉢と同一時期の底部であると考えられる。

以上みてきたように本遺跡では，Ⅳ層出土の大半が後期後半～終末に，Ⅳ層の1部及びⅢ層

出土は晩期初頭に位置付けられよう。

土器組成についてみれば，全体の土器量が少ないので，明確な比率は呈示できないが，浅鉢の量は西平～御領期に比べて晩期に増加する傾向があり，これは九州内での動向に合致する。(註5) また，貝殻文系土器と磨研系土器との比率を見ると，前者が少量で，後者が大半を占めている状況である。これは，市来式系の土器分布が縮小していく中で，磨研系の土器が南九州に伝播してくる時期に見られ，鹿児島県の片野洞穴（志布志町）(註6)・若宮遺跡（鹿児島市）(註7)などの状況に類似している。

石器については，少量しか出土していないので，明確なことは言えないが，その中でも打製石斧と石皿が出土していることは，同時期の他地域の状況と同様の石器組成になるのではないか(註8)と考えられる。

（註１）　小林久雄「肥後縄文土器補遺」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会昭和４２年。

（註２）　安藤栄治・高橋信武「大分県宮地前遺跡の採集資料」『赤れんが』第２号，赤れんが出版会１９８２。

（註３）　芹沢長介『石器時代の日本』築地書館，昭和３５年。

（註４）　前川威洋「九州後期縄文土器の諸問題」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会昭和５４年。

（註５）　山崎純男「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究』２・生業雄山閣１９８３。

（註６）　河口貞徳「鹿児島県片野洞穴」『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会１９８１。

（註７）　河口貞徳「鹿児島のおいたち一先史時代」『　　同　上　　』

（註８）　註５に同じ。

第3章　まとめ

中村遺跡の今回の発掘調査は，調査範囲は狭かったが，縄文時代の遺構及び遺物が確認された。

遺構は竪穴住居跡が2軒検出されている。いずれも円形プランを呈しており，住居跡内に焼土面を有し，2号住居跡は炉と思われる部分を有している。規模は直径2m程度とやや小型である。縄文時代の住居跡として県内では過去下弓田遺跡（串間市）[註1]の1例だけであったが，近年，平畑遺跡（宮崎市）[註2]・セペット遺跡（高千穂町）[註3]で確認されており，本遺跡で4例目であり，貴重な資料である。平面プランは下弓田遺跡の方形を除けば，あとは全て円形又は楕円形プランである。住居跡の時期は，前記の土器の分類より考えると，縄文時代後期終末から晩期初頭の頃と考えられる。また1号住居跡と2号住居跡の時期差は存在する可能性はあるが，出土土器の量が少ない点，また出土土器の系統の相違などから，現在の所は不明である。今後，この時期の貝殻文系土器と黒色磨研系土器との共伴関係が明確になった時点で判明すると思われる。

また遺物は，前記したように後期後半から晩期初頭にかけてのものである，県内ではこの時期のものとしては，陣内遺跡（高千穂町）[註4]出土の土器群の一部が相当するが，若干様相を異にする所がある。（例えば，陣内遺跡においては貝殻文系土器を含まず，また本遺跡においては細線羽状文を含まない等）。また近年，九州の晩期土器の編年の中で九州全体を同一型式ではなく，地域ごとの編年を行う作業[註5]が進んでおり，その中で，宮崎県は，県南と県北では地域圏を異にする見解が示されている。それに従うならば，県北に位置する陣内遺跡出土の土器群では県南の地域をカバーできないことになる。本遺跡の土器群は県南において，陣内遺跡出土の土器（特に後期後半から晩期初頭）との併行関係が考えられることは注目されるものである。

（註1）　宮崎県教育委員会「下弓田遺跡」『日向遺跡総合調査報告』第1輯昭和36年。

（註2）　宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』（Ⅲ）1982。

（註3）　未報告であるが，調査者長津宗重氏（宮崎県教育庁文化課）の御教示による。

（註4）　宮崎県教育委員会「陣内遺跡」『日向遺跡総合調査報告』第2輯昭和37年。

（註5）　山崎純男，島津義昭「晩期の土器－九州の土器」『縄文文化の研究』4雄山閣1981。

番号	出土地	層位	色調 外面	色調 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	備考
1	B－7	Ⅳ	明茶褐	明茶褐	←貝殻条痕 貝殻腹縁文	←貝殻条痕	2～3㎜の砂粒，石英	良	
2	A－11	Ⅳ	暗褐	褐	貝殻腹縁文	風化がはげしい	1～2㎜の砂粒，石英	普	
3		表採	淡茶褐	淡茶褐	〃	←貝殻条痕	3～4㎜の砂粒	〃	
4	A－5	Ⅳ	暗茶褐	明褐	〃	風化がはげしい	1～2㎜の砂粒，石英 雲母	〃	
5	A－14	Ⅱ～Ⅳ	暗褐	暗褐	〃	←貝殻条痕	1～2㎜の砂粒，石英	良	
6	A－8	Ⅳ	明褐	明褐	〃	風化がはげしい	こまかい砂粒	普	
7	A－11	Ⅳ	茶褐	茶褐	〃	←貝殻条痕	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
8	A－6	Ⅳ	〃	〃	←貝殻条痕	〃	3～4㎜の砂粒，雲母	〃	
9	A･B－13	Ⅱ	淡茶褐	暗褐	←ナデ	ナデ	1㎜の砂粒，黒雲母	良	
10	A－7	Ⅳ	暗茶褐	淡茶	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
11	A－4	Ⅳ	茶褐	茶褐	〃	〃	2～3㎜の砂粒，石英 雲母	〃	穿孔（不完全）あり
12	B－6	Ⅳ	〃	〃	〃	〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
13	B－7		暗褐	暗茶褐	〃	〃	2～3㎜の砂粒，石英		
14	B－4	Ⅱ	〃	暗褐		〃	1㎜の砂粒	良	
15	A－8	Ⅳ	淡褐	暗黄褐	〃	〃	精選されている，石英	普	
16	A－11	Ⅳ	赤褐	黒褐		〃	1～2㎜の砂粒，石英 黒雲母	〃	
17	A－15	Ⅳ	暗褐	淡褐		〃	精選されている	良	
18	A－12	Ⅳ	黒褐	黒褐		〃	3～4㎜の砂粒，石英 黒雲母	〃	
19	A－3	Ⅳ	〃	〃		〃	2～3㎜の砂粒	〃	
20	A－6	Ⅳ	暗褐	明褐		〃	1～2㎜の砂粒，黒雲母	普	
21	A－2	Ⅳ	〃	暗褐			1～2㎜の砂粒，石英	良	
22	A－13	Ⅳ	黒褐	暗茶褐	←研磨	〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	外面にスス付着
23	A－13	Ⅳ	〃	〃	〃	〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	〃
24	B－15	Ⅱ～Ⅳ	暗褐	暗黄褐	←ナデ		2～3㎜の砂粒，石英	〃	
25	A－12		赤褐	黒褐	←研磨	← 〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
26	B－6		暗褐	暗褐	〃	〃	2～3㎜の砂粒，石英		
27	A－13	Ⅳ	淡茶褐	淡茶褐	←		2～3㎜の砂粒，石英	普	
28	A－11	Ⅳ	黒褐	黒褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，金雲母	良	
29	A－16	Ⅳ	暗褐	暗茶褐	← 〃	← 〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
30	A－15	Ⅳ	茶褐	〃	← 〃	← 〃	精選されている石英	〃	
31		表採	暗茶褐	暗褐	← 〃	← 〃	1～2㎜の砂粒，石英多い	〃	
32	A－15	Ⅳ	淡黄褐	淡黄褐	← ？	← ？	1～2㎜の砂粒	普	
33	A－11	Ⅳ'	黒褐	黒褐	←研磨	←研磨	5㎜の小石を含む	良	
34	A－14	Ⅱ'	〃	〃	← 〃	← 〃	3～4㎜の砂粒，石英 雲母	〃	
35	A－7	Ⅳ	淡褐	暗褐	←ナデ	←ナデ	2～3㎜の砂粒	〃	
36	A－12	Ⅱ'	灰褐	黒褐	←研磨	←研磨	1㎜位の砂粒	〃	
37	A－11	Ⅳ	黒褐	灰褐	←	←	1～2㎜の砂粒	〃	
38	A－5	Ⅳ	暗褐	暗褐	←ナデ	←ナデ	こまかい	普	
39	B－17	Ⅱ	〃	〃	← 〃	←ナデ	2～3㎜の砂粒，黒雲母	良	
40	B－4		暗茶褐	暗茶褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英 雲母		
41	A－14	Ⅳ	淡褐	淡褐	←	←	2～3㎜の砂粒，黒雲母	良	
42	A－13	Ⅳ	灰褐	黒褐	←ナデ 研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
43	B－16	Ⅳ	淡褐	淡褐	←	←	2～3㎜の砂粒，石英 雲母		
44	A－4	Ⅳ	茶褐	暗淡褐	←研磨	←ナデ	2～3㎜の砂粒，石英 雲母		
45	A－11	Ⅳ	暗茶褐	〃	← 〃	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英 雲母	良	
46	A－11	Ⅳ	明褐	暗褐	← 〃	← 〃	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
47	B－17	Ⅳ	淡暗褐	淡暗褐	←ナデ	←	2～3㎜の砂粒	普	
48	B－12	Ⅳ	暗褐	暗褐	← 〃	←ナデ	2～3㎜の砂粒，黒雲母	〃	
49	A－13	Ⅳ	黒褐	黒褐	← 〃	←研磨	2～3㎜の砂粒，金雲母	良	

表 2 出 土 土 器 観 察 表 (1)

番号	出土地	層位	色調 外面	色調 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	備考
50	A－17	Ⅳ	暗褐	淡茶褐	←ナデ	←ナデ	3～4㎜の砂粒，石英 黒雲母	普	外面スス付着
51	B－11	Ⅳ	茶褐	暗褐	←研磨	←雑な研磨	2～3㎜の砂粒，石英	良	
52	A－11	Ⅳ	暗茶褐	暗褐	←研磨	←	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
53	A－17	Ⅱ	黒褐	暗褐	←研磨	←	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
54	A－14	Ⅱ'	暗褐	淡褐	←研磨	←	1～2㎜の砂粒	〃	外面スス付着
55	A－7	Ⅳ	茶褐	暗褐	←研磨	←	2～3㎜の砂粒，石英	普	
56	A－15	Ⅱ'	暗茶褐	茶褐	←研磨	←研磨	4～5㎜の砂粒，石英	良	
57	A－17	Ⅱ	淡茶褐	暗茶褐	←ナデ	←ナデ	1～2㎜の砂粒	良	
58	B－5	Ⅳ	暗褐	暗褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒	良	
59	B－5	Ⅳ？	黒褐	灰褐	←ナデ	←ナデ	2～3㎜の砂粒，石英	普	
60	A－16	Ⅳ	黒褐	暗褐	←	←	1～2㎜の砂粒 3～4㎜の砂粒	〃	
61	A－13	Ⅳ	明褐	明褐	←研磨	←	3～4㎜の砂粒	良	波状の線
62	A－13	Ⅳ	暗褐	暗黄褐	←雑な研磨	←ナデ	1～2㎜の砂粒	普	外面スス付着
63	B－6	Ⅳ	暗褐	暗褐	←研磨	←研磨 ←ナデ	3～4㎜の砂粒，石英	〃	
64	A－13		暗褐	黒褐	←あらい研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
65	A－12	Ⅱ'	黒黄褐	暗褐	←ナデ	←ナデ	1～2㎜の砂粒	〃	
66	B－14	Ⅱ'～Ⅳ	淡赤褐	淡赤褐	←	←	2～3㎜の砂粒，石英 黒雲母	〃	部分的に研磨が残っている
67	A－12	Ⅱ－1	暗褐	淡黒褐	←ナデ		2～3㎜の砂粒，黒雲母	不良	外 スス付着
68	A－15	Ⅳ	黒褐	茶褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒	普	
69	B－15	Ⅳ	暗褐	暗褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英	良	
70	B－14	Ⅱ'～Ⅳ	黒褐	黒褐	←ナデ	←ナデ	1～2㎜の砂粒，石英		
71	A－14	Ⅳ	暗褐	黒褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英 雲母	普	
72	A－13	Ⅱ'	暗黄褐	暗黄褐	←ナデ	←ナデ	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
73	A－5 B－1	Ⅳ	茶褐	茶褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	良	
74	A－15	Ⅳ	黒褐	くすんだ黒褐	←研磨	←雑な研磨	1～2㎜の砂粒，石英	〃	
75	A－15	Ⅳ	黒褐	淡褐色	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，黒雲母	〃	
76	B－8	Ⅳ	暗茶褐・茶褐	黒褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	〃	外面スス付着
77	A－15	Ⅳ	黒褐	黒褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒	〃	
78	A－14	Ⅳ	暗茶褐	淡褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
79	B－17	Ⅱ－Ⅳ	茶褐・黒褐	茶褐・暗褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英	〃	外面スス付着
80	B－16	Ⅱ－Ⅳ	暗茶褐	茶褐	←研磨	←	2～3㎜の砂粒，雲母	〃	
81	B－6	Ⅳ	黒褐	暗茶褐	←研磨	←研磨	4～5㎜の砂粒，金雲母	〃	穿孔有り
82	A－8	Ⅳ	黒褐	暗褐	←研磨	←部分的	3～4㎜の砂粒，石英	普	
83	A－11	Ⅳ	暗茶褐	茶褐	←研磨	←部分的	2～3㎜の砂粒，雲母	〃	
84	A－8	Ⅳ	暗褐	黒褐	←研磨	←研磨		良	
85	B－12	Ⅱ	灰褐	黒褐	←研磨	←研磨		普	
86	A－6	Ⅱ？	暗褐・褐	淡暗褐	←研磨	←	2～3㎜の砂粒，雲母	〃	外面スス付着
87	B－7	Ⅳ	淡暗褐	明褐	←ナデ	←ナデ	5～6㎝の小石	不良	
88	A－13	Ⅳ	暗茶褐・黒褐	茶褐・暗茶褐	←研磨	←研磨・部分的	2～3㎜の砂粒	良	スス付着
89	B－8	Ⅳ	黒褐	暗茶褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	〃	スス付着
90	A－6	Ⅳ	暗褐	淡暗褐	←研磨	X研磨・部分的	1～2㎜の砂粒，石英	普	
91	A－16	Ⅳ	暗茶褐	淡暗褐	←研磨	←研磨・部分的	2～3㎜の砂粒	良	
92		表	暗茶褐	茶褐	←研磨	←研磨	2～3㎜の砂粒，石英	〃	
93	A－14 A－15	Ⅱ Ⅳ	赤褐	赤褐	←ナデ	←ナデ	2～3㎜の砂粒，石英	普	
94	A－15	Ⅳ Ⅳ	黒褐	黒褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒	良	
95	A－14	Ⅱ	暗褐・淡茶	暗褐	←	←	こまかい砂粒，雲母	不良	
96	A－12	Ⅱ'	黒褐	黒褐	←研磨	←研磨	1～2㎜の砂粒，石英 多い	良	波状は線
97	A－12	Ⅱ(Ⅲ)	暗褐	暗褐	←	←研磨	1～2㎜の砂粒多い	〃	
98	A－4	Ⅳ	淡暗褐	淡暗褐	←ナデ		2～3㎜の砂粒，石英 黒雲母	普	

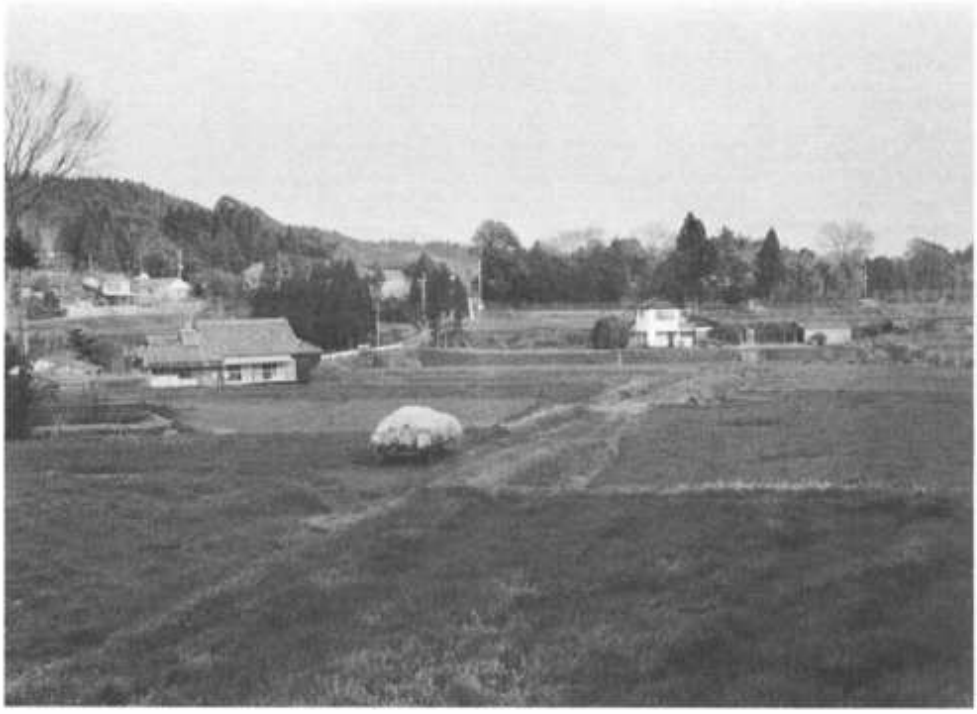
表 3 出 土 土 器 観 察 表 (2)

番号	出土地	層位	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考
99	B－7	Ⅳ	暗褐	暗褐	↔研磨	↔研磨	1～2mm砂粒を多含石英、黒雲母	良	磨消縄文
100	A－8		暗（黒）褐	暗茶褐	↔〃	↔〃	1～2mm砂粒、黒雲母	〃	
101	A－7	Ⅳ	黒褐	黒褐	↔〃	↔〃	1～2mm砂粒、石英	〃	
102	B－5	Ⅳ？	暗茶褐	暗茶褐？	↔〃	↔〃	2～3mm砂粒	〃	
103	B－7	Ⅳ	黒褐	黒褐	↔〃	↔〃	1～2mm砂粒	〃	
104	A－12	Ⅳ	灰褐	灰褐	↔〃	↔〃	2～3mm砂粒	〃	
105	Ⅱ	表	暗褐	暗褐	↔あらい研磨	↔あらい研磨	1～2mm砂粒・金雲母	〃	
106	A－13	Ⅳ	黒褐	暗褐	↔ナデ	↔ナデ	2～3mm砂粒・金雲母	普	
107	A－7	Ⅳ	暗褐	〃	〃	〃	黒雲母	〃	
108	A－6	Ⅳ	暗茶褐	暗茶褐	↔研磨	↔研磨	2～3mm砂粒	良	
109	A－7	Ⅳ	黒褐	黒褐	↔〃	↔〃	2～3mm砂粒・石英	〃	
110	A－14	Ⅲ'	〃	〃	↔〃	↔〃	3～4mm砂粒	〃	
111	A－11	Ⅳ	淡茶褐	淡褐	↔ナデ研磨		2～3mm砂粒	〃	
112	A－17	Ⅲ	茶褐	暗褐	↔研磨	↔研磨（一部）	3～4mm砂粒	〃	
113	A－12	Ⅲ'？	黒褐	〃	↔〃	↔	精選されている	〃	
114		表	〃	暗茶褐	↔〃	↔研磨	1～2mm砂粒	〃	
115	A－14	Ⅲ'	淡赤褐	淡茶褐	↔〃	↔〃	こまかい	〃	
116	B－17	Ⅲ	黒褐	黒褐	↔〃	↔〃	1mm砂粒、石英	〃	
117	A－15	Ⅲ	暗褐	〃	↔〃	↔〃	1mm砂粒	〃	
118	A－11	Ⅳ	淡茶褐	淡茶褐	↔〃	↔〃	1～2mm砂粒、石英	〃	
119	B-13-14	Ⅲ－Ⅲ'	〃	淡赤褐	↔〃	↔〃	1～2mm砂粒	〃	
120	A－12	Ⅲ'？	暗褐	暗褐	↔〃	↔〃	こまかい	〃	
121	A－15	Ⅳ	淡茶褐	淡褐	↗あらい研磨	↔	3～4mm砂粒	普	
122	A－15	Ⅳ	〃	〃	↗〃	↔	〃 砂粒・黒雲母	〃	
123	A－12	Ⅲ'	淡褐	暗褐	↔ナデ？		1～2mm砂粒、実母	〃	
124	Ⅱ－14	Ⅳ'	淡茶褐	〃	ナデ		黒雲母	〃	
125	A－11	Ⅳ	暗茶褐	〃	あらい研磨	あらい研磨	黒雲母・石英	良	
126	A－14	Ⅲ'	淡暗茶褐	〃			2～3mm砂粒・石英	普	内面ススス
127	ⅡEW セクション	Ⅳ	淡褐	淡褐	↔ナデ（一部）		2～3mm砂粒	〃	内面剥落
128	A－4		〃		↔ナデ		黒雲母	〃	
129	A－3		〃	淡褐	↔〃		2～3mm砂粒	〃	
130	A－3		淡赤褐	茶褐	↔〃	ナデ	2～3mm砂粒 多含雲母・石英	〃	
131	B－12	Ⅱ	淡茶褐	暗褐	↗〃		2～3mm砂粒・石英	〃	
132	A－12	Ⅲ	〃	〃	↔〃	ナデ	1～2mm砂粒	〃	
133	B－18	表	明褐色	黒褐			3～4mm砂粒・黒雲母	〃	
134	B－7	Ⅳ	暗灰褐	暗褐	↕研磨		1～2mm砂粒	良	
135	A－6	Ⅳ	暗茶褐	暗茶褐	↕〃	ナデ	1～2mm砂粒	〃	底面に調整痕が残る。
136	B－12	Ⅱ	暗黄褐	黒褐	〃	〃	2～3mm砂粒・石英	〃	
137	A－6	Ⅳ	淡赤褐	〃	↕〃	〃	2～3mm砂粒・石英	〃	
138	B－6	Ⅳ	淡茶褐	〃	↕あらい研磨	あらい研磨	2～3mm砂粒	〃	
139	A－13	Ⅲ'	淡暗褐	淡暗褐	↕〃		〃	普	風化がはげしい。
140	A－8	Ⅳ	茶褐	黒褐	〃		1～2mm砂粒・雲母	〃	
141	A－2		〃	淡茶褐	〃		2～3mm黒雲母	〃	
142	A－7	Ⅳ	淡茶褐	黒褐	↕研磨	あらい研磨	3～4mm砂粒	良	
143	A－11	Ⅳ	黒褐	〃	↕〃	↔研磨	1～2mm砂粒	〃	
144	B－11	ⅡⅣ境	〃	〃	↕〃	↔ナデ	1～2mm砂粒・雲母	〃	
145	A－13	Ⅳ	淡茶褐	暗茶褐	↕〃	研磨	1～2mm砂粒	〃	内面ススス
146	A－16	Ⅳ	暗茶褐	〃	↕〃	ナデ	〃	〃	
147	A－11	Ⅳ	明茶褐	黒褐	〃	研磨	1～2mm砂粒・石英	〃	高杯の脚部

表 4 出土土器観察表 (3)

図　　版

図版1

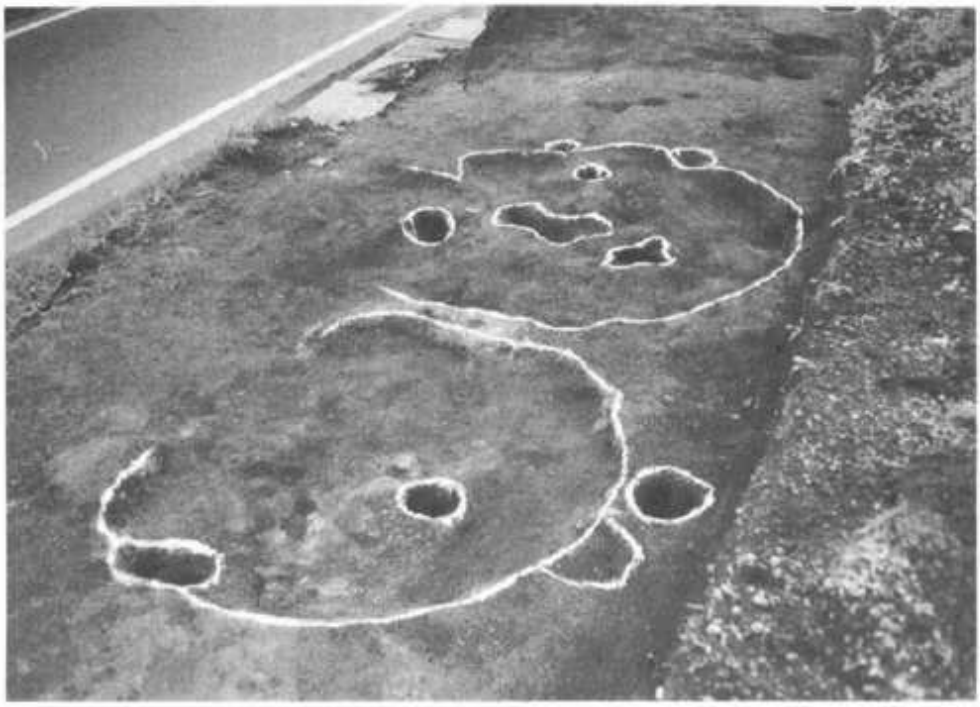


遺　跡　遠　景

発　掘　区　全　景

図版2

遺　物　出　土　状　況



1 号 ・ 2 号 住 居 跡

図版3

11図－1

6図－1

12図－30

11図－10

17図－99

12図－29

15図－76

12図－28

16図－89

13図－53

出　土　縄　文　土　器

図版4

8図－6

20図－6

8図－7

20図－5

20図－1

8図－8

出　土　石　器

山田町文化財調査報告書
第 1 集

中 村 遺 跡

昭和５８年１２月２５日発行

発行　山田町教育委員会
印刷　(有) 昭 和 印 刷
TEL (27) 8899